

辨 榮
聖 者

ひきつらぬき

中

光明大系

お慈悲のたより

中・下巻

巻頭お写真説明

(1) 辨栄聖者尊影

大正七年九月

長岡市法藏寺書院にて

(2) 歓喜光の図



光明大系

お慈悲のたより

中・下巻

巻頭お写真説明

(1) 辨栄聖者尊影

大正七年九月

長岡市法藏寺書院にて

(2) 歓喜光の図

光りて乃
光りて乃
光りて乃
光りて乃
光りて乃



佛地
海
歌

御慈悲のたより 中

一

アミタ如來に三身一體とて、もとは獨一にして三の身とわかれてあらせらるるのです。三身と申します一には法身二に報身三に應身と申す。この三身は本一體にてましますのです。法身と申すのは天地萬物のすべての本にして、かたちあるものもかたちなきこゝろもみな此法身を本とするのであります。

實に天地萬物は日月や地球のめぐることにしても、其它の地球の萬物が起きたりかくれたりするすべてのものが、ちやんとときまりが有て毫しもその規則をたがへませぬのは、唯ひとりでにめくらめつぼうにかうなるのではありませぬ。この大もとが即ち如來の法身であります。

法身ほつしんとはかたちもなくすがたもなければ、すべてのすがたもかたちもみな此法身このほつしんから出來できるのであります。

法身ほつしんははじめもなく終はりもなく、何なんの處ところにもみち／＼て有あらぬ處ところはないのであります。其法身そのほつしんの本體ほんたいから出でました天地萬物てんちばんぶつですから、わたくしどもの身みもいのちもこゝろも、みなそれをはなれては生うれ來くることも出で來きず、かうして活いきて居ゐることも出で來きず、何一なにひととして法身ほつしんの本體ほんたいを離はなれたるものはありませぬのです。それで天地萬物てんちばんぶつの大なる備そなへつけを以もつて生うれていいかされ居ゐる。この一切いっさいのひとてふものは、目的もくてきなしではありませぬ。からだをそなへいのちをあたへ、こゝろをそなへ下くだされたので、ついではこのこゝろを活いきてをるあひだに、まづそのことを深ふかく心こころにかけて大だいなるめぐみをうけて、この心しん靈れいがいとときよきかぎりなきいのちとかぎりなきひかりのたゞ光榮くわうえいのみときよき處ところにいたるのが、かうしてこの世よに生うれ出でて人ひとてふ身みをうけ。たましひをうけたるものゝ目めできであります。しかればいかゞして其目的そのもくてきを達たつするのでせう。いかな

る御方がこれをたすくのでありませう。

二報身、前の法身てふも報身てふも本は一のアミダ如來にましませども、法身の力にて生れて保存せられをりしものをすくふときに報身てふ徳をあらはして下さるのです。報身の如來はいつきよきたふとき處にましまして、かぎりなきいつくしみとかぎりなきひかりとみちからを以て、あらゆる處をてらしまして、之を信仰するものを可愛ゆくおぼしめして御まもり下されてこゝろのなやみとわるきかすを取りのぞきて、靈化とて、心をよくなほし下されて、いといさぎよき生活をなさして、そうしてこのよのをわりには親しく尊きみおやのみもとにゆくのであります。そのみおやが即ち報身のアミダ如來にてまします。

三應身と申すは、前の報身の如來は夜もひるも何の處にてもいと大なる恩寵の光りをもて、すべてのものをいつくしみて、すくひあげよふとしててらしわたらぬ處はなけれども、いかにせんわたくしどもの凡夫の目と心にはわかりませぬのです。そ

こできよき處にまします報身如來よりこの世界の人々をたすけんが爲に、聖きたましひを分けて御出ましになりましたのは、すなはち、アミダ如來の分身にてまします釋迦如來にてあります。アナタはアミダ如來即ちわたくしどものミオヤの御わかれでありますから、アナタの御生涯は唯た愛てふもの一つであります。わたくしどもはたとへいかほどの苦しみにあふても難にあふてもいかなることに對しても、アナタの御生涯の御ことどもを伏しておもひあげますれば、不足の念もぐちも何もかもなくなつてしまふのです。なせなればアナタは、人爵としてはこの上もなき一天萬乗の位にましまし、富は四海をたもち國中の榮花を御自身にあつめることの出来る果報を有ちながら、夫らのことをばやぶれぐつを捨るように思し召て、たゞ一切衆生の自分の心のまどひより己をなやまし、身をなやめ心をいためてこの世後の世くらきよりくらきにまよふものをたすけんといと深きいとかたき金剛の一心より、つひに王宮のがれ出て山に入りて道を學ばんが爲には王の冠も瓔珞も悉くぬぎすて、一重のけさを

御身にまとい、日々に一米一麻をもていのちをさへ、林の中に夜を明し樹の下石の上に座をしめて、たとへわれ身はくだけ肉はつきて、骸はしやりにならうがまゝよ、一切衆生の心霊をたすけることのみがまださとらぬうちは、うごかじと一心つひに上もなきさとりを得なされて、それからといふものは、衆生さいどの爲なれば、もろもろの外道邪見人のために刃をむけられ、あることなきこと種々のそしりをきはめられ、みちをひろめるさまたげをうけけれども、衆生の爲なれば、毫しも心にかけるともなく、たゞくミオヤなるアミダ如來の御慈悲をすべての行と思と言ばとにあらはしましたのであります。全體しやか如來のさとりといふのは、いか成ものでありませう。何のためにあれほどのことが出来たのでせう。ソコが眞のきゝ處である。

一日如來靈鷲山にましまして法を説とするときに、何とも申し上げようもなきうらはしき御よそほひをしめしなさせられました時に、あなanteふ御弟子は釋尊の御よそほひを拜みまして申上りました。アナタは御こゝろのうちに何とも申上ようなない御よ

ろこびをいだきてましますように御みうけ申上ます。それはどういふわけなのでありませうと申上ますと、如來の仰るには、我はいつでも、尊きアミダ如來がわがこゝろの宮にましますのであるから、どのようなことに遭遇ともそれはほんのうのはの事、心の底にまします處のアミダ如來の靈はいつでも尊く聖かにましまして居らせらるゝから、それをおもへば、外からくることなどがこゝろにかゝるものぞ。是聖き靈がわが本尊である。是ばかりがいつも生きてまします如來である。わがこのからだはそれをひきさつてしまへば、あとは人の供養で保存してをるめしぶくろばかりである。われいま一切衆生のために、この聖き靈にましますアミダ如來の愛をすべての物にわかつてやりたいのである。宇宙間いかに廣さも是なかつたならば何かある。

たとへわが肉體はけふにきえてしまふとも、いま我心の宮にましゝて無限の愛光を以て、わがたましひとなり、生きてまします聖きものはのちゝいつになりても常住でかはるものではない。肉體がなくなつてこの精靈ばかりに成つた時は、眞の極

樂世界である。これがましませば肉體の苦しみもなやみものゝかすではないと。

それであるから汝もよく存じて居るだらう。われはいか成る苦難にあふたときでも
アワテたりビツクリしたり、色アヲザメたりまた火のようにイカリたりする舉動はな
いことは已にしりぬべし。是全くアミダの愛われにましませばなり。是が活きたる宗
教である。是が眞の釋尊である、之を人々にわからせてこの中に復活せしめようとする
のがわが最終の目的である。是が佛法のたましひである。譬へてみせようか、世の精
神てふものが有るから、目や耳の活用あり、五臟六腑四肢が悉くはたらくのである。
若し魂が一つぬけてしまふたなら、五官も四肢も知覺も運動もなくなつて、どれほど
の知識も博藝も力量も辨才も何一つなくなつてしまふだらう。宗教の靈もその如く、
人の精神に感應して宿りたまふ如來の靈がとゞまりまさずば五戒も十善も六はら密も
四聖諦も十二因縁も十力も十八不共の法も一切智も金胎兩部の密法でも天臺の四觀で
もなにもかもなくなつてしまふ。天に太陽がないやうなものである。この如來の靈こ

そわれ／＼が本尊である。

さて先ほども申たる通り釋迦如來が昔の榮花をすてゝから、左ほどの苦難を自ら好んで受けて、わたし共をたすくるみちを御さとり下されたのですから、そのことを思ひ上ればわたくし共はどれほどのことでもあきらめがつかぬわけではないのです。けれどもそうゆかぬは凡夫とほとけとのちがひがあるからだらうとおもひなさるでせう。そうではありませぬ。そればかりでは、心はできるのでありません。それは成るほど釋迦如來の苦難のことをおもへば、少しはあきらめはつくかはしらねども、そればかりではしかたなしのあきらめにて、一時安んずるかはわかりませぬが、夫ればかりでは御おしへの本意ではありませぬ。實際にしやか如來が思召しに成りますれば、いか成ものにも身よりもいのちよりも何より天地にもかへ難きアミタ如來の聖き靈によりて人の魂を生れかわらせて、人々のこの身が即ちいける如來の本堂とするのであります。眞に如來を信じ深く愛して如來の御こゝろを欲みますると、アナタは常に其人

の心の宮にましまして、なげきにはなぐさめの聲となり、いかりの炎には清き雨となる、うきが中には安かれよとの御手を賜はれ、よきことには爲せよ、いさみてせよ、しりぞくなといふようにおもはるる。わるきことには、わが心にやどり玉ふ靈の御聲はなすなくとおもはる。くらきにも心にあかるきを與へ、おそろしきにも安きを與へ、すべての眞といと高き善といと美しき徳とは是より生じて來ますのです。これを得れば身はこゝに居ながら魂は聖衆であります。いか成ことでもやせがまんなく、よろこんでしのぶことができます。なやみにも憂きにも、そは浮き身にあること、心のおくには、聖き光になぐさめられます。古人のうきことのかさなる身こそうれしけれ聖きめぐみのたよりとおもへば、ともいはれし人さへあります。

よきこともあしきことにもうきにもよろこびにもみな、如來の聖き光り尊ときおはしめしをおもふて、それに引かへしてしまふのであり、聖き御名をとなへて其の尊き思召が自己のこゝろにあらはるゝように御祈りなされ候ことが最肝要にて候。

楞嚴經の會坐に、もろ／＼の菩薩百千の大衆にたいして如來の仰せ玉ふには、ヤ
ヨもろ／＼のひとたち 汝等は已に佛法のなかに於て奥室に入りていまは還る處なき
までに至れり。それにつきておの／＼銘々に初めて信仰を起したる動機とまたいか成
因縁によりて信心開發いたし、無生忍をいたせし、言を換へていはゞ心の更生なせし
か、それをよく物がたりをせよ。しからばのち／＼の修行者のために大に信心をす
め修行する助成となり、また參考に成るであらうものよとの聖旨を被りて、みな／＼
畏こみまつりてまづ第一番に釋尊最初の御化度を蒙りたる所のアニヤキヤウデンニヨ
がすゝみいでゝ自身のさりとをえたる時の因縁を具さに申のべられにき。つぎ／＼な
にがしのかたと次第に我發心せし動機とさとりしさまをかたりけるに、發心緣無量と
やら、さまざまの因縁によりて佛種を萌すなかだちとは成りしなれ。さて第二十四番

目に大衆のなかよりすゝみ出でたまひしところのひとりの賢者、いとうるはしきその
貌姿、翠の髪は自ら肉髻に結び、青蓮の眸纖月の眉二八の月の面丹果の唇を動かして
欣笑をおこせば、光顔ひかりを添ふ。かりうびんがの聲を發すれば、衆人愛敬せざる
なし、この賢者こそはせいしばさつと名のらせ玉ひける。聖者彈咳してのたまひける
は、それがしこと發心しふかく信心をえまた無生忍をさともし時の因縁をいまつぶさ
に申上げませうならば、そもく過去無量劫のそのかみ、無量光如來と申し奉つる佛
世に出ましぬ。つゞきて合せて十二の如來世に出興し玉ひ、末の超日月光佛ふかき御
めぐみによりそれがしにいと聖き御法りを教へ玉ひき。すなはち念佛三昧とぞ名づけ
られたり。そはいかにその三昧を修するぞとならば、たとへばこゝにいとなさけふか
き母にひとりの子ありけるに、子はふと家を出て母のもとを迷ひ出でゝより、つひに
久しく他國にありていたく困乏し苦を受けることかぎりなし。あまたの身のくるしきに、
むかし母のもとにありて朝な夕なになではぐくまれしことなど思ひ出でより、しきり

に母にあはまほしく、あくがるゝことかぎりなく、寝てもさめても忘るゝ間もなくぞありけるに、また母のかたにてもわかれにし子のいかにふびんやとかなしみのきはみなく、子をわするるひまもなかりしに、子は母をおもひ母は子を思ひ、母と子の相互に憶ひ念ふ念力は、たとひ身は千さとの雲をへだてたればとて心は毫しもへだてなければ、子があくがるゝおもひのうちに母の面かげは宛然として眼の前に彷彿したりしそれと同じく、如來はまことのみおやにてましませば衆生は子なり、子は一たび本覺眞如のみおやのもとをまよひ出で、久しく六道のちまたにたゝすみ、まことのみおやましませりともえもおもほへず、久しくさまよひけるに、あまり世のはかなさに一たび御のりを聞待りてより、はじめて如來はまことのみおやなることをしりてより、いまはみおやをたかきみそらのあなたにあくがれこなたはつたなき煩惱のあかにけがれ見るだにあさましき身とはなれども、さすがはおや子のしたしみはわが身のほどをわすれ、みおやをしたふことはかぎりなく、寝てもさめても憶ひ念ふことの斷ゆる間も

なかりしに、

如來はことに大慈悲にてましませば、つねに衆生を愛念し玉ふことしばしといとまはましまさぬにぞ、あくがるゝ子の憶念のなかに如來は宛ながら聖き靈なるみすがたは心眼の前にあらはれ玉ふ。いかにありがたきぞやこれを念佛三昧とはなづく。

但し衆生行住坐臥につねに如來を憶念ふこと子の母をおもふ如くにてあれば現在當來遠からず佛を拜見し奉る。餘の方便をからずしてたと寢てもさめても如來を憶念し奉つるばかりぞ。これを香光嚴と名づくなり。それがしは此念佛三昧の法によりて無生忍を得候へばしかしてよりこのかたあまりかたじけなく候へばすべての人に教ふるに此念佛三昧をもて示すなり。

これぞそれがしが信心獲得したる因縁に候ぞ。念佛三昧によりて自ら衆生の心も佛心と成ることは、譬へばいとかはりたかき香物を器にいれ置く時はその器もそれに薫染していつしか同じかはりと成るごとく、衆生佛を念すれば所念の佛の聖き靈が能念

の心に薰染して凡心自から聖心と成るなり。これを香嚴淨と名づく。方便をからずして成佛するところの法にぞありけると。

我本因地、以念佛心。入無生忍。今於此界。攝念佛人。歸於淨土。

これなんそれがしが深く佛門に入り無生忍をえたる因縁に候ぞと、八音響をながしてのべ玉へば、百千の大會は信心肝に銘じて念佛三昧に意をかたづけ、しやかむには善哉々と讃嘆し玉ひき。

さればには過去久遠劫のむかしより念佛三昧をもて自利々他の因縁ふかければ我國に降誕し聖源空大師と化を垂れ玉ふにも念佛三昧をもてろくの衆生を攝し玉ふ。衆生佛を念すれば、佛心自から凡心に薰す。

香香器に感染する念佛三昧の法と、大師の、

あみだ佛にそむるころの色に出でば

秋のこすゑのたぐひならまし

の御詠のこゝろを思ひ合せてげにふしぎにたふとかりける。されば四智圓明の月は
第一義諦の空に輝き………迹を垂れては宗祖の遺風を仰ぎ、本地のむかしを仰では法
王の智慧門を掌り玉ふ。孰も念佛三昧をもて寐寤に佛を憶念して自己の胸を虚にして
秋のこずゑのたぐひならまし

との宗祖大師の御むねにならひ玉へかし。

三

子を憶ふ親の心は親を念ふ子の心と常にはなれず。

聖典に、如來の光明は遍ねく十方世界を照して念佛の衆生を攝取めて捨玉はすと。此
意は如來の光は普遍に照し互れ共、殊に念佛の人に聖意が感應て、光明の中に攝めて
玉はると云ふ事である。善導大師は此文意を、衆生行を起して口に佛を稱ふれば佛即
ち之を聞玉ひ身に敬禮すれば佛之を見玉ひ、心常に佛を念すれば佛即ち之を知り玉

ふ。衆生佛を憶念すれば佛も還た衆生を憶念し給ふ彼此の三業相捨離せず故に親縁と名づく。(斯意を今圖に表はしたのである。)

如來は私共の大御親にて、私共の靈は其子である。如來の恩寵に由て私共の心靈は靈育て、聖き人と爲して頂くのである。

私共には靈性と肉體とが有りて、肉體は人の子で、靈性は如來の子である。肉體も母親の乳汁にて養なはれる様に、靈性は如來の光明にて育てられるのである。肉體も赤兒が初めて産聲を揚た時には母の顔さへ見へねども啼く聲を便に母が乳房を含ましてくれる乳を呑むから次第に成長する如くに、私共の靈性も、如來の光明名號の眞理を聞き、如來は實に私共の靈の御親であると、確かと自覺した時が恰ど靈の子が産れたので、眞から稱名の聲が發する様に爲たのが靈性の産聲である。稱名の聲は發する様に爲たが未だ御親の慈悲の聖顔は膽めぬ。然れども稱名の聲する處に如來の靈乳は與へて玉はる。即ち念佛心に如來の光を感受するので、それが靈を食ふ食物である

夫より漸々に光明を受ける丈に靈性が益々發達し、つひには如來慈悲の聖容を拜めるようになる。亦平常も御慈悲の懷に安住しつゝある身と想はるゝ懷しい親様と寝ても寐ても共に在て離れぬ想である。而すると弱き私共の心の生活に非常に力と爲る。(如來の聖寵と私共の心との親密な因縁は此圖に示されてある。)

次に肉體にも日々の食糧なくては應はぬ如く、心靈の命も靈の食物がなくてはならぬ。靈の食物は無形であるけれども心に津々として得も言れぬ計の妙味は感じらるゝ、肉體も小兒は乳に養はれ、成人の後には如何なる食物でも自から消化する如くに、靈の食も始は味も左まで感じないが、熟する時は無限の味が感じられる。

心靈の食物の味を二種に分ちて、法喜と禪悅と云ふ。初の法喜をうれば何いふ感じがあるかとならば、眞に信心が成熟して心の花が開きたる上には、從來とは心機一轉して靈の曉となり、夫からは氣分が快廓浩蕩として、天地も一變したかと思はれ、溫和なる春氣に櫻花の麗はしきを呈するうちに、靈氣の卓たる中に心の花開きて、常盤

の春は長閑なる気分となる、之を法喜と云ふ。また法悦とも云ふ。

次に禪悦と云ふのは、三昧樂とも云ふ。此は一心念佛して三昧を得ると、無我の境に入りて如來の恩寵と自我とが神秘的に融合する其味を善導大師は、身心融液ほどに不可思議とのべ玉ひ、明照大師は、もぬけ果たる聲ぞ涼しきと曰ひ、得も言はれぬ三昧の悅樂を感ずる時の妙味である。

法喜と云ひ禪悦と云ひ、何れも深く宗教心の成熟した上の靈感である。何れも神を養ふ、心を快活にし心廣く體肝かならしむ感情上の興味である。眞實生命のある信仰は、斯る微妙の味はひを以て養はる。故に活動の原動力とも成る。

世の人々肉體には和洋の料理に美を味はひ口を恣に爲るも、心靈に極りなき味はひの感ずるなきは、畢竟肉の奴隸である。

凭る妙味を以て心靈を養ふ、靈的生活に入る者はいかに幸福ぞ。吾が愛する諸彦よ、君の心は聖き糧を以て養ふ給ふ哉。實に三度の食よりは、尙尊とき靈の糧を求

めて、心を養ひ清き生命となり、此現世を通じて、永遠に盡ざる生命を保ち、大御親の光明界に歸る事を得る人となり玉へ。

四

斯一縷の光明われらが無始の無明を破す。われらが甚深の罪惡を除く。われらを極樂にみちびく。此ひかりによりて更生していける觀世音となりまた大せいしとなる。斯の光の外に佛法あることなし。この光を外にしてげだつあることなし。しやかむにこの光を示さんが爲に世に出たまふ。法藏ばさつこのひかりを世にあらはさんが爲に五劫に思をこらせり。此のひかり即ちなむあみだ佛なり。この光りによらざれば畢竟して三惡道免るゝことなし。ア、佛子この光をみとめずして可ならんや。この光われらが眼をさます。この光我に行べきみちを照す。斯光自己を返照せしむ。斯光我と人との融和をなさしむ。斯光しやばを變じて極樂となす。斯光凡夫を轉じて聖となさし

む。斯光鬼を化してほとけとす。斯光十方三世の諸佛を作る。

五

名號南無阿彌陀佛、南無は宗教的關係の衆生より佛に對する信仰心、あみだ佛とはこの關係の佛より衆生に對する恩寵を表象す。佛の恩寵と衆生の信仰とに因縁の宗教的關係を結合す。衆生の信仰なきときは佛の恩寵に致一するなく、佛の恩寵なきときは、信仰にしてこの關係をなすに縁なし。

なむあみだ佛とは宗教的關係を名を以て表示する義なり。通じて南無のみを解釋し次に別して彌陀の願意に準じて南無の義を解釋せん。

南無とは梵語にして華には歸命と譯す。この命を以て佛に投歸する義なり。いまは釋す、命とは衆生の天然的精神生活なり。是從來の受想行識の相續なり。この精神生活投歸して佛の恩寵に即ち全體全幅を佛の恩寵に投歸す。此より人は從來の五蘊相

續ぞく即すなはち精神生活せいしんせいくわつの命いのちを捨て、阿彌陀あみだの新生命しんせいめいに入るべし。

この状態じやうたいを歸命きみやうと爲なす。命いのちといふもこの肉にくの色蘊相續しきうんさうぞくを歸きすると言いふにあらず。精神生活せいしんせいくわつを命いのちと云ふ。精神生活せいしんせいくわつを佛ほとけに投歸とうきして彌陀みだの新生命しんせいめいに入いしめて南無なむの義ぎを表へす。

六

至心ししんに深く信しんず

自身じしんは罪惡ざいあくの凡夫ぼんぷなれども

如來みよは慈悲じひの父ちちに在あります故ゆゑに大願力だいぐわんりきを以もつて必かならず攝受せうじゆしたまふことを

至心ししんに愛樂あいぎやうす

如來無上の慈悲をもて衆生を愛したまふが故に

我もまたすべてに超て如來を愛樂したてまつる

至心に欲望す

眞善美の靈國に生れて聖の世嗣とならむことを

また一切の衆生と共に安寧を得むことを

七

理想のぼさつとして生活せるもの、遠大なるのぞみなしに日をくらすべからず。望

みなしにあるものは已に心霊死したるものなり。いか成る望かこれなる。聖國の世つぎたらんことなり。聖國の世つぎとならんにはその資格を備へざる可からず。資格とは何ぞや。聖旨の如くにきよからしむるなり。ミオヤにあらせ玉ふ聖徳を與へらるゝために望ををこすなり。すべての眞理をさとらんとす。心霊をみがくなり。四面玲瓏とかゞやくように心情を如來と融合するなり。またこの神聖なるみむねをあらはすうにはたらくなり。正義のみむねをあらはすよふにはたらくなり。世つぎといふことを忘れざるなり。無上の欲望を以て、安んぜざるなり足れりとせざるなり。一日もむだに日をくらすゑるなり。一寸の光陰を千金よりをしむなり。むだ話をして時間を費すことをせぬなり。

欲望なき人は貴重なる時間を浪費するなり。一日は極樂の百歳なることを思はざるなり。

欲望なき人は如來が常に與へつゝある無價の寶珠をうけざるなり。

この欲望はいけるくわん世音なり、しやかむになり。

八

別紙維摩經により少しく信仰の御すゝめまでに認め候もの、若しも御主人の御耳にも相成候はゞ幸ひに存候。

釋迦如來御在世の時、毘舍離國に維摩居士と申する、えらい在家のぼさつが在まして、此居士には釋尊の御弟子衆も、悉く呵責を言はれぬものは有ませぬ。故にみな恐れて居らぬはなき程の御方でしたが、或時病氣となりて夫が爲に多くの人々を教化なされました。維摩經と云ふ御經が、其病中の説法であります。其御經のはじめの方を少し書ぬきを認めませう。經に、時に維摩居士が病相を示して病牀につきました。すると國王や、大臣、其外長者衆などが、みな御みまひを申すると、居士は其訪問し

たる衆のために廣く説法しますのに、諸の仁者よ能く御聞よ、今此身は無常できまつて常住なものではない。無力無堅で自分の命をいつまでも持つて居る力の無いものにして、速に朽るの天則是免れませぬ信すべからず。苦の器、惱の道具で衆の病の聚まる所であるから諸仁者よ、かような身は、明智者なるものは決して怙みにはいたしませぬ。てうど此身は聚沫のなうなもので、しかととつて持せ置ことは、できぬものであり、泡の如で久くもつものでも有ませぬ。是身は陽炎といふて山に住む鹿が遙かの處のかげらふを見て渴愛から水だらふとおもふて走りて近にいつて見れば何にもない、やうなものである。此身は芭蕉のやうなもので、いく重のかはをむけば眞の身はないやうなもので、是身は幻の如く顛倒より生じたものである。是身は夢のやうなもの眞實なものでは有ませぬ。是身は影ぼうし見たやうなもので業縁から現れたのである。是身浮雲のやうなもので須臾にして變滅す。是身は電の如くにしてすぐに消えてしまふ。是身は我ではない。地水火風のかりにあつまりたるものにて實際我もので

はない。此身このみは智ちなし、草木きやくや瓦かちや礫こしと同じ土つちのかたまりである。是身このみの動うごくのは風ふう力りきのためである。是身このみは穢きたなき不淨たじやうのものである。是身このみは百病ひやくのあつまる處ところ毒蛇どくじやのすまひである。夫そであるから決けつしてどこまでもそう執着しうぢやくすべきほどの貴重きちゆうなものではない。であるから諸仁者しよじんしやよ惠顧いこひすべきものである。けれども當たまに樂欲らくよくすべきは佛身ぶつしんである。此身このみを捨すて清淨眞實しやうじやうしんじつなる佛身ぶつしんとなることを樂欲らくよくなされよ。そのわけはなせといふに、佛身ぶつみといふは即すなはち清淨法身しやうじやうほふしんである。土つちのかたまり煩惱はんごうのかたまりの人身じんしんとは異ことである。無量功德むりやうくどくと聖きよき智慧ちゑより生しやうじ戒かいと一心しんと智慧ちゑとより生しやうず。大慈大悲だいじだいひ即すなはち如來にょらいは慈悲じひと喜きと捨しゃとより生しやうず。布施ふせ、持戒ぢかい、忍辱にんにく、精進しやうじん、禪定ぜんぢやう、智慧ちゑ、六神通りくしんづう、三明みやう、三十七道品さんじちだうひんより生しやうず。止觀しくわん、十力じゆりき、無所畏むしよふ、十八不共法ふぐほふ、一切善法さいぜんほふ、眞實不放逸じんじつふはういつ、是かくの如ごとく無量むりやうの功德くどくのあつまりたるかたまりが即すなはち佛身ぶつしんと申上まをしあげるのであります。であるからしてどうしても捨すてなければならぬものは、よし捨すつるとも眞實しんじつの法身ほふしんは求めなければなりません。この如來にょらいの法身ほふしんを求もとるには菩提心ぼだいしんを發はつすべきものである。菩提心ぼだいしんと

は即ち無上の佛果を得んと欲する心なりと。

この佛身を求むるばだい心とは我淨土の信仰によれば即ち阿彌陀如來の本願力を信じて、我こゝろをあなたに捧げてあなたの聖き旨が我が方に來るやうに、あなたの聖き御名をよびあなたの尊き聖きみこころを念じ奉る時は凡心と佛心といつしか取かへて下さるのである。我は罪ふかき惡き心なればこれをすてゝ、あなたの尊きみこころを念じまする故にあなたのかきよきみこころが我がこゝろに入來るが故に、何となく有がたく尊とく感じられて來るのであります。

是く如來の尊きみこころによりてかたまりたる心識とてたましひはこのかりの肉體はそつくり此土に捨置きて、神識は聖き樂しきみ國に生れ、神識がこんどは相好圓滿秋の月よりも麗はしきよそほひ、神通智慧無量功德が顯はれて來るのである。左ようなる心やすがたと顯はれるのは今の此如來を信念するこゝろがさうなるのであります。かりのからだは維摩居士がいはれた通り終に朽ち果てしまふのであるから、いか

にもせんこの心識に聖き如來の恩龍に靈化して聖き清淨法身の佛身となるように聖
 きみなを稱へてねてもさめてもわすれぬこと肝要にて候。前に維摩經に佛身とは無量
 功德の身と申されましたのは、説つくことも出來ぬ功德なれども、萬德恒沙の名號
 を稱へ、あなたの聖意を仰ぎますれば、自然と其功德はみな、行者の方にソツクリと
 如來の萬德をゆづり下さるのであります。只管に信じて聖き御名を稱へなされ。無量
 壽經に、一世の勤苦須臾の間にして後無量壽國に生ずれば壽樂極りなく、永く道德と
 合明すと説いてあります。

至心に信じ樂うて彼國に生せんと欲して御名を稱ふるが本願の念佛にて淨きみ國に
 生るべき御約束であります。

九

此ほどの御書翰拜見致候。みな様がかはるゝ御すぐれ遊されぬとのことをうけ

たまはり、ついでに定めて御看病づかれ等のことにて候はむ。それこれ何方御ころつかひのほどをと案じ申上、處はしばらくへだち居ましても同情同感まことにおもひやられます。アナタ方は同じく、唯一の如來をミオヤとあがめ、みなぼさつの同胞にてあります。しますれば同胞のアナタ方が病魔のために侵され、ことに同じ同胞にても御婦人衆は天性としてころのよわきのがあたりまへなのですからまことにほるかに同情をもて案じ上げずに居られませぬ。しておもひ合すればいと御慈悲ふかきミオヤなる如來は愛し玉ふ聖子なるアナタ方に對していかがばかりかは御ころをいためさせ玉ふぞと伏しておもひ上げます。

それについても、わたくしは思ひますから申上ます吾愛するところの同胞のきみたちまでに。此肉についての苦しみと悩みとは限りがあります。うか／＼として若しも心霊をながく闇黒猛火の中に陥し入るときは、きわまりがありません。さてまた佛教を信する人のよく申ことでありますが、もろ／＼の苦がありますと是も前世あ

れも約束と申しますけれども、成ほど夫もそうでありませうけれども、それよりはなほ進みてかようにとりまするがなほよろしいのであります。この肉體のかぎりある苦しみのために一心をおこさせて、心靈のかぎりなき幸福を與へむがための御方便であります。

人間は艱難も苦難をも經驗せぬ人は人のおもひやりもなく、また自分の心靈のことについても眞から氣づきませぬ。ことにいかにふかきミオヤの御じひをもふかく感じませぬ。ミオヤの御めぐみによりて日々明き光りも清き空氣も新しきかてをもあたへて下さる是は何のために斯して下さるといふのに、この生命をあたへ玉ふのは、かぎりなき心靈のためにてありますけれどもそうはおもひませぬで、たゞ氣まゝに自由にくらし一生肉體のことばかりにくつたくして夢の中にむなしくくらし、心靈はますますけがしとほしてしまふのであります。しかるに苦難にあひまするために自分のつみのふかきことも感じミオヤのたふとき御慈悲をも感じられますよふになれば永遠の

かぎりなき幸福を獲られます。

それでありますから前世の因縁を今果す爲ばかりですと丁度前々の借金を償ふよふなので苦しみ甲斐もなく、本のしかたなしのあきらめであります。そうではありませぬ。ミオヤの御じひが得ました上はなやみも苦しみもみな心靈の幸福をうるため信仰をかためるため、是がために無限の幸福をうべき御慈悲をふかく感じせんが爲の方便とおもふて、ます／＼すゝみて如來のみひかりをおもひ御めぐみを念じますれば、いよ／＼御慈悲がふかく得らるゝのであります。

我心に具る苦しみと悩とはいか成方にも之を取除きて呉れるものは有ませぬ。たゞひとりのミオヤなる如來をまごころにたのむより外みちがありません。

また自己の心靈に眞の幸福を與へ下さる方は、ひとりのミオヤなる如來ばかり與へ下るのであります。

ミオヤは晝も夜も常恒不斷に御慈悲の光のなかにおさめて愛護して下るのであり

ます。

たふときアナタの御名をとらふるはあなたの御思召をわたくしにあらはるゝよふに
いのるのであります。

眞に如來の御じひを深く得ますと人は不幸も幸福と變じ肉の苦のために心靈の妙
樂を享受するよふになります。善導大師は諸佛の大悲は偏に苦者に於てすと仰られま
したのは、如來の御慈悲はひとへに苦みのある處にふかくかゝるのであるとのことで
あります。

衆生の方になやみふかければふかきほど如來の大慈悲もふかくかゝるのであります
如來は肉眼にこそ見えね、いづれの處にも御こゝろはあまねく充みちてましますば、
ただまごゝろに

ア、ミオヤよ如來よ、あなたの聖なる御こゝろをもて我にそゝぎ玉へ。あなたのあ
たゝかなる御じひをもて我に安慰を與へ玉へ。あなたのきよき光をもて我罪をきよめ

玉へ。あなたの天地萬物にのこらず持たまふつよきみちからをもて、わたくしどものよわきこゝろに力を與へたまへ。われ／＼ごときこゝろのよわきものに力を與へむがためにあなたは、大願をおこし玉ふ。ア、ミオヤよ、いか成ることをも忍ぶことをうる力をあたへ玉へ。と、尊き御名をとなへていのるとき、あなたの御ちからはこなたのこゝろを助け玉ふ。たふとき御名をとなへて御じひを感じ、いか成ることも忍び通してのちにこそ、まことに／＼ふかき／＼ミオヤの御じひはたしかめらるゝのであります。なほ申上度候へども後便にゆづり候。

一〇

日かげの駒のあしなみいとはやくもはや今年も秋のなかばも過にけらし。其のちは御無音いたして候まゝ、

無量壽經の聖文を少しく和解してものして申進候間御讀みなされて御信仰の養ひとなされ候へかしと存じ候。

釋迦牟尼佛は先に阿彌陀佛の淨土莊嚴のさまをこま／＼と御説き明しなされて心盡こころの歸着きやくすべきところをしめし、つぎに此世このよのさまを説きしめして肉體にくたいにのみ執着しやくやくするひとのあさましさをしらしめたまひし。

無量壽みりやうじゆの聖城じやうじやうは微妙安樂みまうあんらくにして清らかなることはかぎりなく、これをきゝし上うへには誰か力めて聖き名なにきよめられて眞しんと善ぜんと美うつくしきに人々ひとびとのこゝろは成なるべきもの、聖き旨みづねを念ねんすれば自おのづから自己じこのこゝろもきよくなるべきは自然しぜんの道理だうりにてぞある。凡そ世よの中に、あみだ佛ぶつの聖意せいゐと光ひかりとほど眞善美しんぜんびなるものはあらじ。かの御名みなをよびつゝ、御こゝろを仰あやぎ奉らば、いつしか我わがこゝろもすみわたりにて、明あかく潔きよくなるべきものぞ、みだにかよふこゝろはいよ／＼深ふかくなるにつけ、ます／＼かぎりぞしらぬ道みちにすゝみゆくなるぞ。各おの／＼つとめはげみて自ら之これを求めなされかし。しかる時はまどひのきづないつしかされて、五惡ごあくのみちはやがて閉とぢぬべし。聖き道みちに昇のぼることはきはまゝりなく、聖き御國みくには往ゆき易やすくして人なし。其國逆違そのくにりごころをひせず自然しぜんに牽ひく所ところなればなり。

其國は眞理にかなふ處故に逆達せずとは申なり。いかにとなれば、人は皆無限の生命をねがふ、かし處は無限の壽なり。人は皆無限の智慧を欲望す。彼しこは無限の智慧を得る。人は老病死とすべての苦憂をきらふ。彼處は老病死及び苦と憂とのなき處、まことの靈福と生命とは彼處に到らずして何處に求めん。彼國は心靈のよろづの徳と幸福との花の開きたるところなり。

精神界に必ず得らるべき靈福を求めずして眞理ならぬ老病死の天則をまげていつまでもながらへ、苦憂のなからんと欲するものをろかなり。何ぞよしなき事を心にすてゝつとめて道徳を求めざるや。まことのいのちと樂とは必ず極りなく得らるべきもののぞ。しかるに世間の人は薄俗にして五欲の樂ともいはさ、よろづをすてゝも急に爭ひ求め、此劇惡極苦の中に勤身營務て自ら世をわたり尊卑上下のへだてなく、憂苦なきものはなし。

屏營として愁苦して念を果ね慮をつみ、煩惱の爲に追つかひされて心の安き時も

なく、田宅奴婢あればあるにつけ憂へねばならぬ。家財産物なければ無きによりて心配があり、一あればまた一がはしくなり、是みつれば是が不足となり、欲求はかぎりなく、満足は得がたし。

朽はつる物の爲には是非とおもふて憂惱しながら、自己の一大事の事には心にかゝる端もなし。あたら月日を空しく暮し、命は限りあるものなればやがていのちの暮となりにけるも、あへて善を作せしとか道德のおもひもなく終りぬれば、身死して當に遠く獨り去りゆかねばならず。己が心のまに／＼ゆき先の趣くべき處善惡の道しるものなく、獨り生れ獨り死し獨り去り獨り來る。自己の行を追ひて苦樂の地に趣く、自ら之を當くるので代るものなし。窃々冥々として別離すること久長なり。道路同じからざれば會見期はなし。何ぞ各强健の時に努力て善を勤修し精進に度世を願せざる。極長生を得べし。如何ぞ道を求めざる。安んぞ須つべき處ぞ、肉體にいつか至極の幸があらふかと待つとても天より降らず地より出でず。唯つまりは白骨となるのみ。

あまりながくなり候間御經のぬきがきを半にして、また佗のことを少しく御はな
し申候兼々も認ためて上げましたが、元祖大師の御詠に

あみだ佛にそむるこゝろの色にいでは

秋の梢のたぐひならまし

この御詠のこゝろを案するに、元祖大師とていまだ念佛門に深く染こまぬ若き昔は、
平凡の人の如くに世の五塵六欲には染ぬことはいふまでも有りませんが、夫にても十
八の時より四十三までは比るゝ山の奥にこもりて一切經を始め和漢の書籍に眼をさら
し、經をしらべ祖釋を研究し其様なことにのみ専心に屈たくして、まだ世間から見た
ならば立派かはしらねど實際の修行の方面より見れば、まだ青くなまめかしたる
こゝろのすがたにてぞ有。四十三より一心専念彌陀名號ねてもさめても彌陀より外に
おもふことなくいふことなく、年久しく功つもあり今は彌陀の聖旨の眞と善と美とに染
こみしこのこゝろは、めにも見えたならば實に秋の紅葉にたくらぶべし。

其あみだはとけの聖旨に染みしころの奥は、うれしいのでありませうか。はたかたじけないとか尊いといはうか、何といふて其心の色を名づけませう。

秋くればたつたのもみちばかりでは有ませぬ。人しらぬ奥山の紅葉もいろつくことは同じことなれば、私どもとて常に念する心はいつしか難有といはうかうれしいと云はうか心の奥に染まるのであります。

一一

日かげのこまのひまをすぎぬるてふ、月日のときこと、月を見るすきさへなきに、もはや今としてもいつの間にかは秋ははやすぎて、冬のはじめとはなりにける。うけたまはれば御老母さまには、八月頃よりながらくのあひだ御いたつきにてあらせられ候よし、此ほどは御ころようならせられしことにきゝはべり、おどろきてなによりよろこび申居候。御玉づさに御夢のうちに御歌の事不思議なることにて候。そは全くふかき御ころろざしより感ぜしならむ。まことに惟れば、此の世のさまは日々に斯

く明し暮しつる事も、みな夢かまぼろしのごとくにて候。明日のたのしみとまつまもなく、いつかきのふのゆめとなり、來るとしはと待つとも是またしらぬ間に去年の夢とはなりにける。まことに期して居るこの身も、おもへばあやしげなるものにてぞ有ける。さて直ぐさま御目にかゝりて物がたりなどいたし度は候得共左もまゝならねば、取まじりながら古徳がたの法語などをしたゝめてまゐらせ候へば、御なぐさみのために御よみたまへかし。

善導大師六時禮讃日沒無常の偈に云く、

人間忽々として衆務を營みて、年命の日夜に去ることをさとらず。燈の風中に滅なんこと期し難きが如し。忙々たる六道定趣なし、未だ解脱して苦海を出ることを得ず、云何ぞ安然として驚懼せざる。各聞け強健有力の時、自策自勵して常住を求めよ。

此偈を略解す。夫世間の人々は忽々といそがはしといふて此營業のために心をとられて、年もいつの間にか暮るゝ。暮るゝに隨て此身も日々夜々に少しも間斷なし

に命はちとまりて去るのであるけれども、それとはきがつかずして居る。譬ば風の前
 の燈のいまにも滅なんことも期しがたき此いのちをもてして、またこの業に隨て神識
 は忙々とまつくらにて六道のうち何れにとて定まりて趣くべき處さへしらぬに、いま
 だ此苦界を解脱すべき安心も起行も定めずして云何に安然として驚きも後のおそれも
 せず、實におろかではありませぬか。各きゝなされよ、強健にして有力の時に自ら策
 ち自ら勵みて、常住といふて不老不死の都を求めたまへかしとなり。(是までが無常の偈
 の解)

また善導大師の勸化の偈(大師が衆生をみちびくためによまれし偈文)

漸々鶏皮鶴髪、看々行步踰躔、

假饒金玉堂に滿とも、衰殘老病免れがたし、

任汝、千般の快樂、無常終に是到來。

唯徑路の修行あり、但阿彌陀佛を念せよ。

(解)に漸々に鶏皮鶴髪なり。看々自身をかへりみよ、行歩に躑躅するではないか、たとへ金銀珠玉は堂のうちに充滿すとも衰殘老病はまぬかれ難し。任汝、千般の快樂あらうとも、無常は終に到來す。唯この無常老病死を出離るゝ徑路は一道ばかりにて、それは但あみだ佛を念じて淨土に生ずるより外になしとなり。

元祖大師の御法語に、

いければ念佛の功つもあり、死なば淨土にまゐりなん、とてもかくても此身には、おもひわづらふことぞなき。

此御法語の意まことにありがたくおもひ候。斯く安心さだめて居り候上には此世にながらへばながらふるほど念佛の功をつみ徳をかさね、此世に於て一日一夜のつとめは淨土にて百年の善を作すに勝りたりと。しかるに若し露の命の終りなば善をききめ美をつくしたる大乘善根界に七寶蓮華の上に生れ、阿彌大法王萬德圓滿の相好を瞻仰し微妙の法を聞き無生法忍をさと、觀音勢至そのほかよろゝの大ぼさつ衆を朋

良とし、三十二相莊嚴の身は光り秋の皎月よりも潔く、三明六通まどかにして、居ながらに十方法界を見聞覺知し、上は十方の諸佛に奉供しまた法を受け、無上のさとりを得、下は十方無邊の衆生をおもふがまゝに濟度することを得。十地の願行おのづから彰れ終に無上佛果を得る身となるべき淨土に往生しぬる身となりては、とても此身にはおもひわづらふことぞなきとなり。また元祖大師の御詠に

あみだ佛にそむるこゝろの色にいでば秋のこすゑのたぐひならまし。

此歌の意、おもひにしみてかたじけなく候。大師は御年四十三のときはじめて専修一行の念佛に歸し晝夜六萬の稱名もおこたりまたふことなし。しかるにいまだ初めて念佛に歸したまひし頃は、是まで一代の經に眼をさらし、あらゆる聖經に心をそめぬれば、いまだ是ぞと御こゝろにしみてそめらるものなかるべし。しかるにいまは一すらに念佛し、こゝろにおもふものは萬德圓滿光明遍照のあみだほとけより外に念するものも想像するものもなければ、年を経るに隨ていよゝこゝろに染おもひにと

ふして漸々にしみこみたる、あみだ佛の光明と慈悲との色にそみこみて、若しもこのころがめにも見えたならば、濃やかにいろつきたる秋の稍ののみぢなしたるいろに比類すべきとなり。われら心にわすれやすく想にそみがたく是ぞとて心に色つきしこともなきは怠りがちなるほどこそはづかしけれ。

一一

蕭しみて啓す。時しも秋のなかば、なにとなく物さびしき折から、かねていかゞと懸念しつゝ、歸京の時を期し、また一たびのおもひもいまはむなしくなりぬ。

故猪狩隆成君の御訃音に接し、いまはたゞ、御名をとなへて御回向を申上候より外なき、なきひとの數に入りにはけりとは、げに世は無常、老病死はいかなるひとゝて免れざる世のならひとは申しながら、いま更のようにおもはれける。しかしながらおもんみれば、釋迦如來金剛不壞の御身に於てさへ、ばつたい河のほとりなる、つるの林にて、二月十五日の夜半の月と共に、ねはんのくもにかくれたまひぬ。されば三十

二相ふたさうのうるはしき月つきの面おもてだに赤梅しやくばい檀だんの煙けむりときえたまひぬ。一ひとたび生うまれてつひに死しに歸きせざるものとて何なにか有あべきぞと、道理だうりはさりとはしりながら、悲嘆ひたんは人ひとの情なさけにて、いかに免まぬかるべきものぞ。併しかしながら、君きみは御生ごせい前ぜん御おんすこやかなりし時とき、一ひとすらに彌陀みだの本願ほんぐんを仰あやぎ、もはら稱名しょうみょう三昧さんまいなりしこと數年すうねん、たとひ御病氣ごびやうきのためにしばらく廢はいしたればとて、已すでに彼淨土かのじやうどに金蓮こんれんの上うへにたしかに靈籍れいせきをさだめ置おきしことなれば、たましひは今いまは、花はなのうてなのに昇のぼりしこと、また何なんの疑うたがひかあらむ。いまごろはさだめて、花開はなひききて、佛ほとけを拜そがみ、尊たふときみのりをきく奉たてまつることならむ、なむ阿彌陀佛あみだぶつ。

一三

嚴きびしき御寒おさむさの時とき、いかゞ在あらせ玉たまふ哉や。

御母おんははさまよりの御書おんしよによれば、本月ほんげつ二日かふに御出發ごしゅつぱつにて御地おんちに轉てんじなされ候もとふとの御事おんこと、其御地そのおんちは東京とうきやうとは風俗言語ふうぞくげんごも大おほいに異ことなりまた御友おともだちも有ありませぬので定めし御さびしき事ことと存候ぞんじふらふ。且かつまた家庭上かていじやうのことから萬端ばんたん是これまでは御母おんははさまと御一ご緒しよでありましたの

に、今度は御主婦と成て處理しますのは初めほどは御困難の御事と察上候。

しかれども其れが婦人として世にたちて活動すべき舞臺なので、如來さまから婦人と云ふ俳優の役割を命ぜられて此人間界に出でたる已上は是非ともに、自己の役をは果さねばならぬ天職を以て世に現れたのであります。同じく其役をつとむるのには潔よく活潑に愉快に天職に盡さざればとても名優とはなれませぬ。是迄に御讀みなされし婦人雜誌は唯なぐさみの本ではなく、今日正しく其任に當て天職を果さんとするに付ての龜鑑なのであります。また常に御稱へになる御稱名も即ち、大なるミオヤ如來さまの御名にて在ませば、其大ミオヤさまは、何の處にも在まさざる處なき御身にいませば、あなたが念ずる處に、夜も晝も、かげの形にしたがふ如くにましませば、其如來さまを心に念じて、現にここに在すと信じ、いか成ることも御たよりとする時は、心のすべてのなやみにも、何れにも力に成ます。

あなたに婦人の主婦たるつとめを立派に果させてとの思召によりて、如來さまから

此度は正しく命せられたのでありますから、願くば喜びいさんで其役わりをつとめて下されませ。

一四

野山の梢も吹く風の音も秋の氣に感じてや物寥しき折柄承はれば過にし頃より暫らく御健康をくるはし玉ふとの御事、そは氣候との劇戦に負傷したまひしものと存候。願くば國の爲め家のため、殊には靈を宿す處の神殿たる御身體なれば深く御自愛したまはんことを。

此器械的生理的なる御身體の事につきては斯道に經驗ある醫師先生に一任して疑ひ玉ふことなかれ。

また進んでは生理自然の一大原則は天に在ます

大みおやの掌どられ玉ふことなれば、身心の全幅を

大みおやに御任せまつりて、御身心ともに其權能にもたるる時は、大に心が軽く安ら

かに感じらるゝものにて候。世には随分理に闇き族ありて、身の病氣にて氣力も羸衰せるにも拘はらず、精神にまで非常に氣をもみて重荷とするものあり。また世の中には天に任するといふもとても仕方がないから天に任すといふごときは何やら無理往生のやうに思はれ候。よりは進んで勇み進んで天に在ます大みおやの光明常に輝く處に精神を逍遙せしめ、

大みおやと共に融合し快樂的に一任するに至つて、眞に生きて進んで任すものと謂つべし。

精神を大なるみおや即ち眞神と合する時は身體に病ありても精神に病なし。身の病は自然より借りたるもの、身の内の自然と外界との自然と調和のできぬ處から傷めらるるは據なし。唯調和の出来る策を講ずる外なし。

大みおやの威力を以て力としてあれば、精神は健全にてあり、精神健全なれば精神を以て身體を保護し助力す。

身體若し病む時精神ともに病む如くば身を保護し助力するものあるなし。必ず斃るかしからざれば長く病むに至る。大みおやは天地萬物の備を以て衆生をいかにす。心を以て進んで一任するもの何ぞ夫れ快に向かざるをえむ。猪狩君よ明き光鮮なる空氣、温なる氣すべて

大みおやの賜にあらずや。

食器に盛れる物より薬壺に入りし物、其本はみな 大みおやが天地萬物の中に備へ玉ひし生物礦物等より取りたる物にあらずや。生命の源にまします

大みおや頼もしいかな。ア、慈悲深き 大みおやよ

きよき同胞猪狩氏のために、加被力をたれ玉はんことを希ふ。

君よ、靈活なるこの新鮮の濕氣の中に、すべての病を除きて快とし活す力を與へ玉へり。一念に全宇宙の濕氣を呑み盡す如き觀を以て吸ひ玉へよ。

右御訪問までに、

大みおやのみむねをかしこみて申のべ候。

隆子さま定めて御看護つかれにおはさん、願くば御自愛あらんことを。

静子さん、天に御いでなさる 大きいおとうさまに向つて、おとうさまの御病氣を
はやく能くして下されませと申上ておがみなされよ。天においでの大きいおとうさま
はおとうさんがあなたをかわゆく思召如くに、すべての子どもをかわゆく思召したま
ふ。

一五

肅白残暑尙嚴敷候 折云何被爲在候哉伺上候。

愚柄各地巡廻終りて昨日漸く歸京候。承はれば御老母様久敷御病氣之處竟に先月

十七日西逝爲され候との事、

實に生者必滅の習ひ會者定離の掟とは兼ねて聞ても、今更の感に打たれ候。然ども
御老母様には兼々後生極樂の爲に平素念佛をよく稱へ候ひし事なれば、定めて九品

蓮華の中に往生なされし事疑べくあらじと存候。直に御回向旁伺度存候處
遠國の客も有之また今日は下總の國の寺の施餓鬼何年目にて歸る様な事であれば昇
堂で兼候問何れ歸京之上二十一日頃に御回向方々伺上候。

然るに唯々宇宙の唯一人の大御親様を専ら念じて、神識をば永恒に照り輝く樂
しき御國にて

如來様のまたなき法を御聞きなされて、いよく佛道増進なさる様にみな様も
御念佛を専ら稱へなされて、御回向の程をねがはしく候。余は何れ御面語に申述べ
候。御悔み旁々如斯に御座候。勿々頓首。

一六

吾宗祖法然上人の御道詠に

あみ陀佛にそむるこゝろの色にいでば

秋のこすゑのたぐひならまし

若し人常に五塵六欲の妄境のみに心を染る時は、俗情野卑に化し已りぬべし。専ら聖德豊備の如來をのみ憶念する時は彌陀の光に心を靈化すべし。

獨逸の哲學者カント曰く、吾人が見る處の世界は自己の心を自己の眼前の境界として見るに外ならず。

赤眼鏡をもて世界を見る時は、萬物皆赤色を呈すと同じく自己の心にして已に如來の聖光に同化する時は、世界として清淨界ならざるはなし。

法然上人淨業功つもあり、修養年久しくし、彌陀の聖靈に同化し從來の人間の青色の心は一轉し、如來の神聖化したる内容にして若しもいろかに見ゆるならば秋のもみぢのたぐひならめとの意なるか。

修養の二方面

いかに修行してか成佛し得道し得べきやとならば、宗教的精神修養に二面あり。一は消極的なる而他は積極的なるとなり。消極的の修行とは先づ自己の胸中より群れ出

づる處の一切の妄想妄念を除き去り、すべての心念起るあらば悉く放擲し、無想離念の極、自から自性天真あらはる。譬へば雲霧已に霽れて青天と爲る如し。一切の心念悉く盡きたる處、自然の本性のみ。此自性は、虚と同じく除き去るべきものにあらす。一心工夫し凝神修練して止ざる時は必ず此妙境に達すべし。之を理の念佛と爲す。次に積極的の修養とは、心常に如來の神聖正義慈悲智慧等の萬德豐備なる心王如來を憶念し、一ら祈念し一ら觀念しまたは一心に工夫し、日夜を問はず行住坐臥を論せず、專念功積る時は必ず成せん。宗祖法然上人の内容の靈化したるが如くに、自己の一心が如來の眞理と致し靈化する處の得道なり。

念々に神を凝し心々相續してつひに妙をうるに至らむ。自から懷ける摩尼寶珠をして空しく塵中に棄つるなからんことをこそ。

心眼開き見よ眞理の太陽は萬古に赫々たり。

古人曰く池を鑿りて月を待たず池成れば月自ら來ると。

御たづねの書物

學説の研究としては原人論、起信論、

修行の要としては淨土十要

其外種々あれども先づこれらを御しらべしからんと存候。

一七

拜啓いまだ寒氣もさびしく候處此ごろ御動靜如何に御座候哉と案じ上候。曾て御書翰をいたゞき候ひしにつひに御無音いたし候こと甚だ懺謝し上候。本年は殊に寒さも甚だしき中、御主人様にはいかゞにて候はん哉と大に案じ上候。また榊原御老母様にはいかゞわたらせられ候哉よろしく御つたへを願上候。

信仰の言すこし物して進じ上候あいだ御よみ下され度取いそぎしたゝめしことなれば御わかりがたきことならんと存じ候へ共いづれ歸京の際また御面語に御はなし申上べく候。思にかゝりながら延々にして御無音の段どうか御ゆるし下され度候。

肅白先刻は久方ぶりにて御面會いたし、時間^{じかん}にせまり申^{まをし}のべたき事^{こと}ものこり候^{もちらふ}。

先刻^{せんこく}の一大事^{だいつじ}の安心^{あんじん}の事^{こと}につきては、他^たの事^{こと}とは違^{ちが}ひ、生命^{せいめい}に懸^かはる大事^{だいじ}の事^{こと}にて候^{もちらふ}得^えば、心^{こころ}に懸^かり候^{もちらふ}につき、歸^{かへ}りて直^{ただ}ちに一筆^{いつぷつ}しめして申^{まをし}進^{しん}候^{もちらふ}。

先程^{さきほど}も申^{まをし}のべ候^{もちらふ}如^{ごと}く、安心決定^{あんじんけつぎ}の信心^{しんじん}は、唯一時^{たゞひととき}的^{てき}の觀音^{くわんおん}や大師^{だいし}に對^{たい}してその現^{げん}世^げ祈^{いの}りとは大^{おほい}に趣^{おもひ}を異^{おろけ}にし候^{もちらふ}。

生命^{せいめい}即^{すなは}ち魂^{たましひ}を献^{ささ}げて此世^{このよ}後世^{のちのよ}すべてを御任^{おまか}せ申^{まをし}上^{あげ}、我生命^{わがせいめい}もはや如來^{にょらい}の物^{もの}とさへ、
げてこそ、此罪^{このつみ}深^{ふか}き凡^{ぼん}夫^ぶ地獄^{ぢごく}一定^{いちてい}の族^{やから}なれども、一心^{しん}一向^{かう}に魂^{たましひ}をさへげて御^おたのみ申^{まをし}
上^{あげ}ればこそ、みおや御慈悲^{ごじひ}、憐^{れな}れに思召^{おほしめし}、御^おたすけたまふことにて候^{もちらふ}。已^{すで}に生命^{せいめい}をさ
へげておたのみ申^{まをし}上^{あげ}もせぬで、たゞ口^{くち}に稱名^{しょうみ}唱^{やうとな}へれば、たすけ下^{くだ}さる事^{こと}位^{くらい}なまじ
ひの安心^{あんじん}にて、いかにみおやの御慈悲^{ごじひ}でもたすけ下^{くだ}さる因緣^{いんねん}はなき事^{こと}に候^{もちらふ}。殊^{こと}に他^たの
神^{かみ}や佛^{ほとけ}に一心^{しん}をかけて御^おたのみ申^{まをし}なると云^{いふ}ことは全く如來^{にょらい}さまをかるしめることにな

り、他の神や佛を御たのみ申た時に、如來さまの聖意から捨られた事に候。

一方に他の神や佛を御たのみ申ことは尤もわるきことにて候、忠臣二君に仕へず、貞女兩夫にまみへずであります。命に懸けての安心を、かりそめ事のやうにおもひ込では眞の信心は出来るはずなき事にて候。

眞の信心なれば災難があらうとも命にかゝはる事が有らうとも、本より命をさゝげての上の事なれば、いかなる事情の爲にも、他の神佛にたのみを懸るはずは有べきはずなく候。念の爲に御たづね申ますが、あなたは命にかゝはる事が有つても、已に如來にさゝげたる命なれば、決して他の神や佛を頼み申さぬと云ふ操の立たる安心が決定できるのでせうか。

若しそれはとても出来ぬと云ふ事なれば、

如來さまに對して此の世後の世共に永く御いとまをいたゞく事になされ候がよろしいと存じます。

私も左様にせぬと如來さまに對して申譯なき事にて候。いかにしても他の佛神に祈誓をかける事は止める事はできぬなれば、いつはらずして眞實に正直に私に聞して下され。さうすれば重ねて如來さまの安心の事については已後御すゝめ申しませんから。何だか外の神佛にはたのみませんと今までだまされて居たやうにおもはれ候。

また此のちこちらでは一心に正直にたゞ此世から後の世まで、あみだ如來一佛の外に御たすけ下さる御方はないと、どこまでも御すゝめ申して居るにかゝはらず、かくれて他の神や佛などを祈誓して居ると云ことを聞てはもはやこののちは、如來さまに對しても、あなたに、如來さまの御慈悲を啓くべき つながきれてしまつたのと存じます。

安心の眞實に美しいのは、たとへ命にかゝる事が有つても、あみだ如來あなたの外に決して他の神や佛に御まかせ申ませぬ。あなたの外に私の大みおやは有りません、あなたの外に私の魂を御まかせ申方はありません。

あなたの外に私のむねのうちを明して御たのみ申す方はありませぬ、と云ふ眞實の情操がうつくしいのである。たとへ火をあび水を渡り、日々に百萬遍の稱名をしても、魂をよそにむけぬ清き精神がなければ、

如來何ぞ御むねをそゞぎて下さるはづはなく候。まづは一大事なれば御たづね申候。

一九

欽啓時分柄漸次御暑に向ひ候折、皆様御動靜いかゞあらせられ候哉。御老母様に引きつゞき御平生に回復なされ候哉。愚衲御蔭にて無異に御仕へ申上候間乍他事御休心被下度候。此程迄は熊本地方にて傳道しまた當地に歸り候。いつもながらおもへば月日のすぎゆくことは、しばしも停まらず、年々春夏秋冬同じことをくり返しつゝ、年々に月々に此いのちはちゞまりゆくのみ、月日はまたくり返し盡ることなけれ共、人の身は再びかへりがたし。世の事々は今日は此事また明日は何々といふうちにいつか再び明日といふことなきにいたるは必定免かれがたし。されば何はかにはの

中に於ても唯々忘れまじきは彌陀の名號にて候。

心配事出来れば出来るにつけ、悦び事につけても、彌陀の御慈悲をおもひては稱名すること肝心にて候。悦びも悲しみも苦しみも樂しみも何れも同じ夢幻のほど、何事も夢のなかに於て若も大みおやの御本願にあふことなかりせば、あだにはかなき世に、明けても暮れても罪ばかりをつくり、罪障さんげの念もなく、地獄の業の薪を負ふて落ゆく外は無るべきに、大みおやの御慈悲にあへばこそ、罪つくりながらもさん悔もなす。

日々見るにつけ聞くにつけ、心はけがれぬるも、

如來清淨光にきよめられ、苦しみなやみも、如來の歡喜光に、みなよろこびの心に立てかへていたゞくは、一にこれ如來の御恵にぞまします。實にありがたきは如來の御慈悲にて候。尙申上度事候へどもものちのたよりにゆづり候。

如來の聖きみひかりの中に

めでたき御年を御つもりなされ候よう、

一休和尚が

門松はめいどのたびの一里塚

めでたくもありめでたくもなし。

日々に聖き名によりて、きよき徳をつみつゝあるひとのためには、徳をつもりつゝ、終局目的の眞なる善なる美なる極の方に一日々々に進みゆくが故にめでたきなり。其反對に日々に罪ばかりをかさね、惡徳をのみつみて、恐ろしき惡道に向ひゆくひとのためには、いやな方がちかくなるが故にめでたくもなしでありませう。

日々に一日も空しきなくいたづらなく、聖き旨によりてこゝろの徳をつまれんことをねがふ。尙くさく申上候べくも後便にゆづり候。

此程來はながらくの間御心づくしの御もてなしに預り多謝候。さて月日の過ぎゆくことのはやき、もはや、今としても一月は何時の間やらすぎ去りぬ。ヅン／＼と月日は先へ／＼と進みゆきて而して太陽は一年にして二年と同じ元日とは成ぬれど、人の命は先へ／＼といそぎて少しもあとへはとまらぬ。はやく光明の中の日ぐらしとなりて雨ふらばふれ風吹かばふけいかに世の中は何には鬼にかく憂世の風ははげしくもあら波は甚だしくも、大みおやの大悲の船に乗りえたる身は敢て恐るゝにたらず。

如來にはいかなる事いかなる大難にも大安慰の力あり。もはや精神は大悲の懷のすまひ、形の上にいかなる事に出遇ふとも、それも心を研く器械であると勇氣を奮つて事にあたれば、却つて安心にやれる事にて候。かたちの上にはいかに寒くもこゝろは温かなる御慈悲の懷ろすまひ、たとひ闇きやみの夜もこゝろは如來の光明のなかにと思ひて、一心ふらん執持名號、光明名號を稱ふれば自から心は光明かがやくように成り申候。

二三

如來にょらいの御みめぐみによりて安心あんしんいたし候きよらふ人のこころは、くわんぜをんと同じおな。くわんぜをんには頭上づじやうに如來安置にょらいあんらし玉たまふ。あみだ如來にょらいをつねに信念しんねんするひとのこころには、如來にょらいつねにやどり玉たまふ故ゆゑに、いか成なるばあいにもこゝろうごかざるが爲ためにうるはしきいろを變へんすることなし。

煩惱ぼんなうのほむらも如來にょらいの御みめぐみを念ねんずるときは、たきつせに浴あびむごとくにいつしかやすらかに相成あひなりさふらふ候しべし。

二三

いろはにほへどちりぬるを、桃もももさくらも一ひとさかり、げにあだし世よのはかなさは、常つねなるものぞなかりけり。

一ひとたびひらきてとこしへに、かはらでにほふはいときよき、ひかりによりてさきにける、人の心こころの花はなならめ。

世の中の人の愚かさよ、無常といへば言葉にさへいみながら、無常なるもやさくらの花を、またなきものにめでて、心にさけるときは華を見むともおもはで、ころをよそにのみさせて、生涯を夢のなかにくらしぬることはあなあさまし。願くばあなagaたと共に心の華をながめんことをのぞむ。

二四

如來のみめぐみのなかに、聖くいさぎよく御ひぐらしのほどのり上候。如來の聖なるみひかりは晝も夜もとこしなへに照したまへり。

二五

御名をよぶ聲にこころの雲はれて、さやかに見ゆる月の面かげ
眞晝中のあつさにもかゝはらず、朝夕のすゞしさ秋かせのもののさびしさも鎌倉山の草木にも見るなり。

この頃いかゞあらせられ候哉いっしか御無音に打過候、願くばみひかりのなかに

よろこばしき御日ぐらしのほど是いのり候。

二六

衆生ほとけを念ずれば、佛も衆生を憶念し玉ふ。如來は衆生を憐念して少しもいとまなきは、母の子をおもふごとくにて、大悲しばしもやすむなし。

二七

拜啓其後は久しく御無音。仕り此ほど歸京により御通知いたし候。昨日より二ヶの寺院にまゐり布教のことなどばかりかたりて、今朝ほど御約束のことなれば心せはしくかたりつゝ歸院候ところ、御歸りに相成候よしうけたまはり遺憾に存じ、また折角の御出のところまことに失禮。仕り候。愚衲は一昨年御わかれ申候てより三河國尾張美濃伊勢の間に於てけち縁候ひしに、ほとけさまは多くの淨き御國にまゐる同行の友だちを見つけ下されまして、愚衲はよろこびました。いたるところ御經をよむ人は出來候。みな經に説きし如き微妙嚴淨なる御國へ共に往ことを樂しみなば、此世

の日ぐらしも楽しく候。さて今日は御老母さまと御同道にて御出相成しを私が少しくおくれました爲に御目にかゝりて法の話などをいたしませぬこといたく遺憾に存じました。まことにゆかしきは同じほとけさまの御子といふべき兄弟たる姉妹たる念佛者にて候。たとへ身はここかしこへだつとも、心は同じ御ほとけの光の中にすむおもひ有之候。また御經をよみなされ候ときは、身はここにありながら心は淨土の樂園にめぐりあそぶおもひにて候はん。

ここかしこ身はへだつともちぎりてし心は經の園にあそばむ
經をよむ聲にこゝろもさそはれてたのしき園にめぐりあそばむ

二八

ミオヤの大なる御めぐみを謝し、すべての同胞の幸をいのり候。さて先ごろは御とりこみのなかにて御ねむころなる御意をわづらはし、かたじけなく謝し上候。其後御病貌如何にわたらせ候哉また御つかれは如何に哉。御食事は如何哉案じ申上居

候。愚ぐ納なこのもよりの信しん者じやの信しん根こんを培はい養やうせむが爲ために滯たい在ざいし、明みやう日にちは當たう家け二十にじ二に日にちは誓せい願ぐわん寺じにてつとめ其その後ご兩りやう日にちばかりは矢やはりこの近きん處じょにてつとめ候。かま倉くら行ぎやうは廿にじ七しち八はち日にちまで延えん引いんのことにて候。

よろづを大おほなるミオヤに御おまかせ候て人じん事じをつくして天てん命めいにまかせ候。すべてさふらふのことは出で來きるかぎりつくして、其その上うへ己おのれのことは如に來よさまに御おまかせ申まをすことが眞しん理りにて候。

二九

拜はい啓けい御お贈くりもの今け日ふた到うも着やく候かたじけなく御おん禮れい申まを上あ候。愚ぐ納なこと御お蔭かげにてかはりもなく有ありたく感かん謝しゃのなかに日ひを暮くらし候間御さふらふ安あん心しん下くだされ度たく候。月つき日ひのすぎゆくことしばしも休やすまず、いつの間まにやらんもはや此この月つきも半なか過はにけらし。古こ人じんが夢ゆめとやいはんうつゝとやいはんといひしも實じつにや。さて、鎌かま倉くらの里さとはむかし武ぶ將しやうの數すう代だいの間あひだ住ぢゆうしたまひし處ところ、歴れき史しのみにかすゝものされて殘のこりおりしも、今いまはさびしき草くさむらのい

はゆるもののふどもの夢のあとゝやらん、誰かいひしことあれど、實に此草むらの中にも六百年のむかしは、いくばくの人たちがいかなる夢の見たるあとならんとおもへば、世の中は何にたとへんあさばらけ、きりとさえゆくさま實に、しかし世は無常なれどもあみだはとけのみは、かぎりなきいのち、まことのひかり、この光といのちの中にあさめられて、おこたりがちなながらも感謝の中に暮しつゝある御互ひなれば、先世の中それこれと身についての病等のことは、にくゝはあれどやはり身にそふて居るものなればすてきらふとすれば、身を捨てねばならぬよふなもの。

御ほとけにまかせて心ばかりも安じ暮したく候和南。

三〇

この頃の御あつさことに酷暑候へば、定めて御難儀に候はんと推察仕候このほどは御不恙にあらせられしよし時分柄御自愛のほど是祈候。さて朝がほの一もとの花もみなミオヤの御恵の露によりて咲しものと思へば、その色その香いにめでたき

ものぞ。されば古人も一色一香無非中道とて色も香もみな如來法身のあらはれなりとのべられし。

三一

謹んで新禱を賀したてまつり候。去月昇堂よろづかたじけなく御禮申上候。

くりかへし同じ様なものはかはりゆかねばならぬ。年。またも明て、一年三百六十餘日、矢張り同じように、くりかへすものゝ、其實日々刻々に變遷しつゝある御互の身にて候。一日は八億四千の念ありて、念々の中に、意に順へば貪り、意にかなはざれば瞋り、其他は痴にて、うか／＼と明し暮しぬるたゞ三惡道の業のみにて候。と御佛はときたまはれし。どうかあたら時日をいたづらに過さず、こころにかけて不可思議功德なる、みほとけの御名をとなへつゝ日を暮し度候。念々同じ稱名ながらあみだ佛よりは、無量光の德をもて、念々毎にわれらが、無量の煩惱を亡して、無量の靈德をわれらにあたへたまふ。我ら三毒五欲のおもひも、彼の佛は淨清光にて

きよらかにいさぎよくさせたまふ。こゝろの空やかきくもり、天候常ならぬ時にも、
 歡喜光の光には、おもひの雲やはれて、さやかにてらす月を見ることのうれしきを覺
 ゆべし。こゝろ我にあれば是凡夫、おもひを轉じて佛にあれば是佛、一念佛を念ずれ
 ば一念の佛、念々佛を念ずれば念々は佛、南無無量不老不死尊。

よろこびのひかりのほどをしるときは

ねてもさめてもうれしかりけり

三三

日かげのこまのあしなみはやく、もはやことしも秋の半ば過にけらし。物さびしき
 秋風に感じて、佐屋の里にいませる吾同胞のことを今更におもはれて候まゝ久しく御
 無音せしことをも御わびがてら申進候。名古屋より立んとする頃に歸運法尼西逝の
 ことを承はりてこと定まりぬれば止なく五重傳法の爲に東に歸り再び西にゆく折をと
 思ひ居りしに計らす五月中旬に信州善光寺もうでがてらに長野傳道と云ことに相成

候。同地は十七年むかし傳道せし因縁もあれば二月ほど長野縣内にて宣教し引つゞきて上州にて歸り途の傳道、是また十七年ぶりにて同縣にも粗二月ばかり止まりて宣教いたす内に各地の大洪水、折しも關東大洪水の水源地なる上野國利根郡即ち利根川の水源地に在りて傳道に従事したりし、上州十一郡は悉く大出水、幸に私どもの在地なる利根郡のみが全く無事といふので身には事なく、傳道につくし居たりしが、途中の橋梁陷落通行止絶との事、道の開けるをまちて再び上州高崎市に歸りまた同市に傳道然るに埼玉縣の教會の地方の大水害を被りしことなれば見舞がてら歸りしに、實に武藏の國北葛飾郡は目もあてられぬ次第にて候。

實に此の悲惨の光景を目撃して深く感じたりしは、天地にみおやの御めぐみは充滿るはづなるに、此世界凭る恐ろしき惡魔が伏在して而して吾同胞をかくまでに慘狀を呈せしむるとは實に憎むべき惡魔かな。それをおもふにつけても私どもの胸も、

大みおやの御恵に充さることなれば、何日でも平和と歡喜とに充さるべき筈なる

に、折々貪瞋の惡魔が潜在せしが現れ出て佛性の田地を荒し安心の宅を流失せしむるなどは、もはや慎しみて再び發さざらむことをと存候。被害地の見舞終るやまた今回茨城縣常陸の國へ傳道にまかり出で候。此土地はむかし淨土宗の中興と仰ぐ了譽聖阿禪師の出玉ひし國にして淨土の今日盛隆を見るは全く國師の力なり。また親鸞上人が始て念佛他力の宗旨を開きたるも同じく此地にて候。

昨日は夕まぐれ降る雨につくりし罪も沐がれて十町計りのぼり、眞言宗に有名なる雨引山てふにのぼり、莊嚴美をつくしたる大悲閣の筵にありて大悲の尊像を拜し奉りて、觀世音は吾等が大みおやの長子にましますば、即ち我等の御兄君なれば、懷しくも存じ候。且つまた此國の人々即ち同胞等は

大みおやの御名だに知らで關路にさまよひしもののみ多ければ、願くば御兄さまの御慈しみを以て吾同胞に

大みおやの光明に觸れて良く御子たる本分をつくし、

大みおやの永遠かぎりなき光の御國に入る丈の資格をそなふべき同胞を、御引合せ玉
へと祈念し奉り候。山靜なる精舎に夜を明しぬ。疊石數十尺の高き樓上に在りて、
眞向ふに聲ゆる峯は筑波山てふ己が廿歳ばかりの時に禪那三昧に入て修行せし山なれ
ばむかしを忍びて懷しく感じ候。當國は我生國の隣國なれ共始めて今回傳道に罷出
候。願くば闇の人々に

大みおやの御惠のほどをしらせまほしく候。是より十一月中旬までは常陸と下野
とにて傳道のつもりにて候。

懷かしき佐屋のそなたにあくがれて

大みおやの御名をとなへて吾同胞のために光榮あらんことを祈る。何れことしのうち
にはまたまかり出候て、御目にかゝることの出來うるやうに
大みおやにねぎまつりて候。

尙申のべたき事山々候へども後のたよりにまで遺し置候。

時しもさつきのなかばなれば、ある師の坊にさそはれて菖蒲園に遊覧しければ、あやにうるはしくあやめは咲けらし。花を見るにつきてたゞちに聯想しけるは、かのなつかしき園生に生じける、……心霊の花はいかにともはやこの頃は、うるはしきをきそひ、馥はしきをあらそふて咲けるに定まれることは、よろこばしき胸の中より己にせめて波動はたちたりき。

そは外ならずあづかりしに園丁がいたりて未熟にてかつ懶うく、もしもやあたたら花園を、下手な園丁の爲にしぞこなひはせぬかと、若しも咲くべき時に咲もせぬとせば園丁はむかしならば切腹今日にいはゞ罰金とでも申しませうか、願くば園丁をあはれみ

如來のみまへに面目をあらしむるやうに、あゝ花よ花よとさけびしかば忽ちに心の天は晴れわたりし、いとすゞやかなる聲がきこえける。

「はなはうるはしく、みめぐみのつゆをえて、きよきすがたはみむねの如に、そのかばしきにみさかえをあらはし、たへなるいろは世にあるべくもあらじ。きよきみくにはここにきたりにき。無爲のみやこはよそならず、こころの花のひらくところ、いけるばさつのまします所」かゝる妙なる聲の聞きしより最早や同じくみほとけのみはたらきとはせしながら、あだなる花を見るべくともおもほへず、はるかにそれのかたなる、みそらをながむれば、荒井やまのかねの音はきこえぬ。こころつきて見れば夕日かげいとうるはしく、ふるさとのきよきみくにを彼方ぞと、御名によりて、きよき友のさちをいのりつゝかへりぬ。

三四

ミオヤなる如來の大なる御めぐみに感謝したてまつる。無礙光裡に、うるはしき御こころの、生活をもつて、たふとき御名によりて、みさかえをあらはし、いとも幸なる御院内の多祥を賀したてまつる。

そののち御無音のだん、ざんぎさんげの外なく候。愚衲このほどまで、千葉埼玉地方を經めぐりて日をくらし候。それでもたふとき御じひのふかきミオヤはかゝるなまけものをあはれに思召し玉ひてや一日もたふし玉はすして御つかひ下されしことをおもふと、たゞ／＼かたじけなふ、たふとき御名をとなへて、感謝のほかこれなくと存じ候。來月はみなさまに久しふりにて御目にかかることを得させ玉ふことならむと切に如來さまに念じ上て居ります。

山々申上たく候へども御面語を期してよろづ申上候。

三五

大ミオヤの光明裡に御院内各御精進に御つとめ爲され候事有難き事に候。良に惟れば世の中は夢幻の須臾の程有や無やの萬のさま生者必滅は娑婆の習、會者定離は人界の掟、何人も免かれぬ事ながら、嚮きに辨周法尼の西逝あり、また御院主智隨法尼の御遷化あり。我ら及び皆の爲にも世は無常なり須臾も油斷してはならぬ。

事らに各自に與へられたる生命の時間を、大ミオヤの光明のなかに聖意にかなふつとめを爲して空しく送り徒らに暮してはならぬと云ふことを自覺させん爲に教訓なされしものと信する時は實に御兩尼の皆様に對する御說法は實に深刻なる感有らんと存候。願くば早く身はこゝにあり乍ら、心は大ミオヤの光明のなかに意義ある價値ある生活に入るべき様に御心がけなされる事を望ましく候。

三六

拜啓殘暑尙酷敷候處、御院主様始めとし、御院内皆様同じくミオヤの御めぐみの裡に魔事なく御日ぐらしのほど幸の至りと遙に賀し奉り候。愚僧事もミオヤのふかき御めぐみにより、怠りがちながらも日々御奉公申上ることの能きるのは是全く御恩寵のしからしむることなれば、感謝しつゝ日をくらし居り候得ば願くば御慈慮を休めたまはらんことを。

過日御書翰にあづかり辱く拜見仕候。今回眞如寺の方へは御弟子さん衆が御

都合あしくして御出でに成り兼候やうマ、ならぬ娑婆の習ひなればこれ止むを得ざることにて候。亦承り候へば加藤一正殿兼て御病氣につき御療養の處終に二十三日御命終に相成との御訃音に接しフト感じ候。實に老少不定の習ひとは申しながら、二十四歳を一期として遠く不歸の旅となりしとは眼前の無常に閻浮の露命のいかに果敢なきものぞと思へば、如かじかの法性常樂のみやこに到りて金剛不壞の身を獲んにはと。併し乍ら氏は豫て安心決定して、ミオヤを憧憬しつゝ神を入る日のかたにそゝぎて慈親のみもとに歸せんことを期せるとせば、必らず氏は二十三日午前二時に低頭合掌して高聲に念佛し、ミオヤの御影と數珠とをもちてありしほどは此國に在し、かども、舉頭已入彌陀界、この世界の未だ（ ）時にはならじ一刹那の間には、もはや頭を擧げて拜み奉れば、五百色の光に照らされ水鳥樹林の妙なる響に無始曠劫來の無明の夢さめて、不覺に轉じて眞如門にさとり入らん事、氏は悼を穢土の遺族のかたに遺しおき、自己は神を淨き御くに樂しき御園にうつりて寶の池に浴しては多劫の心魂に染

みたる垢汚あかを洗濯せんたくし、いまはいかに清きよく潔けつよきすがたとは成なりしやらんと思おもはれて候さう
氏しはあなた方がたや私共わたくしもに此身このみのげに頼たのみがたきこと斯かくの如ごとくにてあるとたしかに示しめ
たでは有ありませんか。大なるめぐみのミオヤをよそにして世界せかいに何物なにものかたよるべきもの
やあると教をしへたではないか。私共わたくしもは今夜こんやにも殺鬼まつきが攻め來くることはないと思おもうことが
出來できぬ身みをもて、いかで安心あんしんができません。もはやたしかに如來にょらいの大なる御めぐみの
中うちに安立あんりふして居をりませうか。たとひ有餘ゆうよの身みは有ありながらも、こゝろは淨きよき御みくにの
すまひとなりて居をりませうか。

いけらば念佛ねぶつの功こうつもあり、死しなば淨土じやうどにまいりなん、兎とても角かくても此身このみには、思おもひ
わすらふことぞなき。

と宗祖大師しゅうそだいしが吟ぎんせられませしが如ごとくに、安心あんじんが確立かくりつして居をませうか。御慈悲みじひのミオ
ヤは決定けつぎやうして子こをすてたまふ思おもひ召めしは毫ちひしもましまさぬれども、子こはいかにして親おや
をわすれがちになるのでありませう。わたくしは故一正君こいつくみに對たいして肉にくに對たいするの悼いたみ

と靈たまによるの喜びよろことが交こもに感かんじられます。

三七

生者しやうじや必滅ひつめつ會者くわいしや定離ぢやうりは有爲うゐの世よの通とれ難がたき掟おきてとは兼かねて聞きくもの、御住持ごじうぢ智隨ちずい法ぽう尼に様やうに
 は先月せんげつ廿日にじふにち憂うれき世よの娑婆しやほを辭じして、大おほみおやの在おほします西にしの彼國かのくにに逝やかせ玉たまふたとの事こと
 今更いまさらの感かんにうたれ候さき。先さきに辨周べんしう法ぽう尼に已にに去さりまた御住持ごじうぢ様やうの御遷化ごせんげ實じつにまぼろしの世よ
 につきてねがふてもねがふべきは大おほみおやの聖意せいいにしたがふ法ぽうにて候さふらふ。

假令身たとへみは娑婆しやほに在あり乍なら神こころは大おほみおやの慈悲じひの光明くわうみやうの中に生活せいくわつする身みに一日いちにちもはや
 く成ならまほしく候さふらふ。

鶏にわとりの卵たまごは殻からの中に在あるうちに已すでに眼鼻めはなかたちづくり候さふらふ故ゆゑに殻からより拔出ぬけだしても飛とひ
 出す身みに相成あひなり申まを候さふらふ。

我等われら此肉體このにくたいに在あるうちに佛性ぶつしやうの卵たまごがかたちづくり候さふらふて、みおやを眞實しんじつにしたふ身みに
 成なり候さふらふへばこそ、臨終りんじうに此殼このからより拔出ぬけだして神通自在じんづうじの身みにも成なり得うるものにて候さふらふ。

されば一日も早く慈悲の懷にあたゝめられて信心の開くやうにならまほしく候。

今度世の人々が折角に人の身を受ながら

大みおやを知らで闇きよりくらきにまよふ身をいかにも思へば同情に耐へず。自か
らみおやの光明の中に生れさせていたゞきしことのうれしさ、此御恩を報せんが爲に
また大みおやを信じて見れば、すべての世の人々は皆同胞にて候。其同胞衆をしては
やくみおやの光明中に入らしめ度一心よりして、みおやの光なる小冊子を發行して
毎月有縁の同胞衆に分たんと欲す。實に自から大みおやの光明中にくらさるゝ身と
成りし上からは、實に世の同胞衆にみおやを知らせ、慈悲の乳房を含ませ一日もはや
く親子の名乗り合ひ出來うるやうにしてあげ度存候。七部御送附候間有縁のかた
へに御分け下されて而して毎月御望の方には御送附候間本社の方に御通知下され
度候。成べく多くの人々に御知らせを願ひ下され度候。御弔辭旁々如斯に御座

候。草々

三八

如來にょらいのあたへたまへる明あけきひかりと清きよき空氣くうきとあたらしきかてとによりて一日いちにちのつとめを果はたしたる恩德おんとくを感謝かんしやしたてまつる。今日こんにちのいのちは全まったくあなたの賜たまひなればこゝろをつくしてみむねに仕つかへまつらむことをちかひ奉たてまつる。

三九

この頃ころのあつさよりは煩惱ぼんまうのほむらはなはだし。たきつせのすゝしきよりは如來にょらいの御おめぐみに浴よくするこゝろはすゝしかるべし。つねにこのすゝしき御おめぐみのなかに安住あんぢうして、にごり世よのなやみをやすめたまへよ。

聖きよきみむねのたきつせにこゝろの垢あかをそゞぎ、きよくいさぎよく日々ひびにあらたにしてまたあらたならんよう、いのりたまへよ。

ア、きよくいさぎよし、みめぐみにそゞがれしこゝろは。あなうるはしこゝろよし、みむねにきよめられし身みは。

四〇

拜啓はいけいようやく快晴くわいせいの天氣てんきに相成あひなり候まふらふ。めぐみの雨あめにうるほふて草木くさきのこすくさか
ゆるごとくに、みめぐみにより心靈しんれいのさかふることをなんいのり候まふらふ。

天てんものいはざるも四時じ行ぎやうはれ萬物ばんぶつ成なるの理ことり

如來にょらい様さまは無聲むせいの聲こゑをもてすべてのものに、神聖しんせいと恩寵おんちゆうとをもて警告けいこくし愛護あいごしたまふこ
とを記きし玉たまへ。

四一

過日の御好意奉深謝候。

信仰の要天體に太陽在りて其發するエネルギーによらざれば地上の萬物は生存できぬと同じく、心靈界に無量光佛の靈光によらざれば靈性は生活できぬ。

天に太陽は光放ちつゝあるも瓦や礫では反映せぬ。靈界の日輪は照しあれども心靈によらざれば反寫せぬ。如來の日輪光は衆生信仰の金剛石に反映す。みだの日光は善導法然の心的金剛石に映じて地上に輝く。ひとり善導法然のみならんや、人に靈性具す、念佛三昧を修して金剛石の光いづる時は、必ず反映せん。此反映のみ衆生を闇黒より救ひ出すの光明なり。

蕭つしみておもんみれば、無量壽經むりやうじやうきやうの序文じよぶんに、彌陀三昧みださんまいに入りなされた釋迦牟尼佛しゃかびにぶつが爾
 時ときに世尊せぞん諸根悅豫しよこんえつよの姿色しきじやうじよく清淨けいじやうに光顏くわうげん巍々すじくたりと淨滿月じやうまんげつの麗うるはしき御姿みすがたと御色おいろとに現
 はれし御おんさまこそは、西にしに輝かがやく阿彌陀如來あみだにょらいの日光につくわうの映うつろひし御姿みすがたにて、我等衆生われらしゆじやうの爲ために
 誰人たれびとも阿彌陀如來あみだにょらいの智惠ちゑと慈悲じひと威神ゐじんの永とこしへに照てし玉たまふ光明くわうみやうに反映はんえいする時は、器
 の大小だいせうに拘かはらず、彌陀三昧みださんまいに入りて、慈光じくわうに充みるる時は、譬たとひ三月さんげつばかりとても、
 誠まことに三昧さんまいの窟くつだに開ひらくれば、如來にょらいの日光につくわうは必かならく反映はんえいす。すべからく疑うたがふ心こころなくひ
 たすら念佛三昧ねんぶつさんまいに心こころをかけよと教をしへ給たまはりし。我等われらが幸さいはひに若もし人生じんせいこの彌陀みだの光明くわうみやう
 に依よりて、靈れいに活いさるゝみのりにあふことなかりせば、今日々々こんにちくのいと大切たいせつなる時間じかん
 を空ひなしく暮くし、徒いたづらに過すごすべきものを、大經だいきやうに世尊せぞんは自ら模範もはんを示しなされて、こと
 に今日々々こんにちくが大切たいせつなればとて、今日世尊こんにちせぞん今日世雄こんにちせうとて、かの五度ごた度迄までも今日こんにちといふ事ことを

ならべなされしは、全く今日々々を彌陀の光明にいかされるやう聖意のほどこそ知れけり。世に主義と目的と定まらぬ心の生活ほどあさましきはなしと存候。只其の日くを飲食寝起のみに心を奪はれて、冥より冥に入るの外なきものは、實に愚にて候。

願はくば光明主義を以て人生の命とし、益々光明中に日に新たに、月々に向上して、下品より發足して、月に年に進みて、一生の終りには、上品の蓮臺にのぼらん事こそ望みにて候。

名古屋のさとに懐かしき、さよき同胞愛らしきいさぎよき子供たちの居る夕日輝くそなたに、大みをやと共にちぎり深き人々を思へば、ゆかしくもかんばしくも感じられて候。

法身ほつしんてふ大おほみおやの御恵みめぐみと御力みちからとに依よりて、萬物ばんぶつは行おこなはれ、すべては活いかされるものなるを信しんする時は、此頃このころの氣節きせつは毎年まいねん曇くもり、氣きは濕しめつくなりて、折々おり／＼雨あめは繁しげく降りくだるもすべての植物しよくぶつは新緑しんりよく已すでに萌きずし、今いまを盛さかりに榮さかえんとする頃ころなれば、其それらを潤うるはす恵めぐみの乳ちにてあれ。若もしもこの乳汁ちしるの繁しげくあらなくば、いかに今年ことしの若緑わかみどりも元氣げんきよく榮さかへゆくなきを植物しよくぶつの繁しげりてやがて實みのりを充分じゅうぶんにするのは、要えする處愛子ところめいしなる我等われらが糧かてを與あたへ給たまふ慈悲じひの御みはからひと信しんする時は實じつにかたじけなきことよさりととは知らで、世よの人々ひと／＼が此この頃ころの様やうに雨あめが繁しげくては因こまりつる杯さどと御慈悲みじひを忘わすれて、仇あだに思おもふ愚おろかさよ。而しかして若もしも米こめの實みのりの能よくなき故ゆゑに、米價べいか騰貴たうきすれば又またかこち言ことをくりかへす人々ひと／＼のあさましさよ。大おほみおやはよろづにつきてかく迄までに御心みこころづくしに我等われらを恵めぐみ給たまふ慈悲じひの深ふかさをば、將はた何なにが爲ためぞとたづねれば、今いま此この體からだを活いかし玉たまはる目的もくてきは、私共わたくしもの心靈しんらいを永遠とこしえに眞まことの生命いのちと、圓満えんまんなる人格じんかくなる佛ほとけになさんが爲ための方便ほうべんとして、天地てんちの恵めぐみとなりて、此身このみを養やしなひ玉たまはる事ことを信しんする時は、是非ぜひとも今こん

度は慈悲のみおやに温められて、佛性の卵は孵化して、現在を通じて永遠の生命を發見せざればならぬものと存じ候。我は是全く如來の寵兒なりと自覺する時は、昨日迄の我とは違ひて、天地も新らしく、萬物も悉く清らかに感じられ候。

願はくば如來の慈悲によりて、新たに生れし吾同胞よ、ますく御惠みの乳にて、發育のいよく榮えん事をぞ望ましく候。

四四

此頃來は、何かと容易ならぬ御世話様に相成り、又出立の砌りも御見送被下、難有く御禮申上候。

すべては夢まぼろしのかりのことなれども、只々無限の大慈悲のみおやの、天地法界にみちみてるまことの御惠みを以て、此の身心に充しめんが爲に、清き御名を稱へて時々刻々に向上せん事を願はしく候。此の頃田甫の稻はいよく榮へ候。いまに穗

も出づるならん。私どもの心も如來の日光に育てられて、益々光榮ならん事を願はしく候。

暑さの強さは、御慈悲の深さをおもふて、すべてにつきて、御おやの慈悲に感謝し奉まつらん。

よろこびの光わたれるしるしにや、

春の心はのどけかりけり。

さき頃祖山にて、念佛三昧の道場にて、大なるみおやのいつくしみのなかにつどはれたる同胞相つどひて、大みおやの慈悲の乳房に哺養されし當時のごとく、今日も明日もいつも同じく慈悲の懷にをりて、益々成長せられん事を祈候。

四五

如來の慈悲は、天地に充滿し、此の世も後の世も、からだもたましひも何れも皆恵

みなされて、活々と活かさんとし給ふのでありますに、然るに此の身體も精神も大み
 おやの思召にかなふ様に活きんとすれば、現在から永遠にまで、眞實に活きるのであ
 るにも拘らず、あさましくも子供は自分かつての愚かなる了簡を以て、活き様とする
 ものですから、死の道をいそぐ様になるのであります。無量光のなかに活けるものは
 必ず無量壽に活きるのであります。大みおやなればこそ、何につけても大みおやの聖
 寵は感ぜざるを得ぬ事にて候。

四六

此頃來は御心盡しの御供養に預り多謝候。
 心被下度候。

御見送を蒙じり、無事到着候間御休

善導大師は彌陀身心遍法界、映現衆生心想中と。また佛を見んと欲すれば佛目前に
 現じ給ふ。故に近縁と名づくと。念々常に佛を念じ、聲々永しへに稱名し、只要す

如來にょらいと常つねに離はなれざる事ことを。

如來にょらいは心靈しんれいを照てうす大日光だいにくわうなり。如來にょらいに向むかふ事は光明くわうみやうなり。如來にょらいを背せにする人ひとはいつも闇黒あんこくなり。常つねに淨土じやうどに向むかふて進すすむ人は光明くわうみやうにて、三惡道みくだうに向むかふ人は闇黒あんこくなり。いさましく大光明だいくわうみやうに向むかつて歩は々に進すすみ、念々ねんくに向上かうじやうせん事ことを。

世よの中に大みおやの永とこしへに、我われを惑あはれみ、又愛またあいを注そぎ玉たまふ御みむねを議しらすして、闇やみの中に日ひをくらすもの程ほど不幸ふかうなるはなく候そう。願ねがはくば大みおやの御みむねを普あまねく傳つたへて、光明くわうみやうのなかに日暮ひぐさしなざる様やうに、いかなるものにも御知みしらせの程願ほどねがはしく候そう。

すべての物ものに超こへて、最もつとも大切たいせつなるは、眞しんの自己じこの眞生命しんせいめいと、自己じこを完成くわんせいすること候そう。そは唯自己ただじこの眞しんの大みおやなる如來にょらいの光明くわうみやうに照てられて、自覺じかくの光明くわうみやうと相成あひなり、又自己またじこを圓滿えんまんに成なし玉たまふ御力みちからは全くあなれより賜たまはる事ことに候そう。

信心の金剛石は一心に念佛して、彌陀の聖旨と、念力とによりて、琢磨さるゝ信心
 寶石琢磨する故に、彌陀の日光は反映す。日光は照しあるも、瓦礫は反映せぬ。
 只要す。一心念佛して佛力かゝる處に心の寶石は發揮することを。

四七

如來様はいつもつきまとうてましませどもこちらがにげまどつて居るので居ないか
 と思ふ。念佛三昧を以ていとなつかしきミオヤと共に離れぬやうになりませう。如來
 様と一しよなればちごくの火の中でも楽しいとおもひます。

如來さまの御じひを忘れて居りますと知らずく三惡道の中に心がすむやうになり
 ます。御じひの乳をのむことを怠りますと發育が出来ませぬ。如來のみむねのあらは
 れをいのりて有りがたし有りがたしと感謝の念とつねに喜ぶことが乳をのむと同じこ

とであります。

四八

先頃滞在中は御世話になり、種々御親切にして下されたので嬉しく感じ候。矢張り此世界の人間は修行の爲に出て來たのであるから、せつせと一生懸命に仕事をする丈の事はなした丈が徳である。御身は大みおや様の思召に叶ふて居るから皆さんの口をかりて、つかふて下さるのであるから悦びて、御つとめなされ。なまけて一生終る程不仕合せの人はない。何故なれば、如來の思召に叶はぬから、如來様が使つて下さるぬのである。それを知らずして、仕合せ等と思ふて居る人があれば、それは大いに間違ひである。如何なる身分でも、皆如來様から御計らひにてあるから、自分は自分の今日が丁度適當してゐるから、これを悦びてつとめる人は、如何なるつとめをして居ても、満足に日々つとめらるゝのである。この頃の暑いのは、一年食ふ處の米をなる

べく澤山收獲ある様にしてやりたいといふ大みをやの思召から、暑いのである。その思召を知らぬ者は、一年食べる米の稻を能く養ふ爲に暑いのであるといふ事を知らずして、唯暑いなどいふてゐると、遂にはばちがあたつてようきがわるくして、米のとれぬ様になると又なき事を云ふ様な人が多いので、大みおや様の御むねを安じあげる事が出来ぬのである。何年でも、よく／＼悟りて見れば、皆ありがたいのである。だから何でも悦びてつとめよ。

歡喜光裡に新らしき年を迎へ、不斷光中にます／＼向上せられん事をすゝめ申候。娑婆はうるさいと云ふけれ共、娑婆のうるさいのではない。ウルサイと思ふ御身の心がうるさいのである。だから自身の心から改めて行けば愚痴を云ふ程の事はないのである。此頃の寒さ、火鉢の中の炭火に依りて念佛心を語つて見やう。念佛の念といふ字は人二心にて、二人が一になつた心の姿である故に、念佛者は骸は二つでも心は如来様といつても一になつてゐる。愉へば火鉢の中の炭火を見よ、此の寒さの中にも拘

らず、春の陽氣に麗しく咲き初めた桃の花よりもモット眞紅な色を呈し、ナーニ此の寒さなどは、何のそのと云ふ様に如何にも愉快さうにカン／＼と陽氣に、快活に嬉しげに火鉢の中に燃えつゝ、そうして愛嬌よく火鉢のもとに接近する人の手を親切にも温めて呉れる。それから御湯を養て呉れる。又御餅をも焼いて呉れる。だから誰でも愛して居る。其の愛される中心人物の炭火子さんも前身とも云ふべき、炭箱の中に居た時には、イヤハヤ眞黒な顔をして、冷たいもの而して一寸でも手を觸れると直に眞黒に汚すものだから誰も手をつける事を嫌つて居た。其の炭さんが今度は火鉢の中へ入りに火と一處になつた處が、前とは打つて變つて、寒い間最も愛される中心となつた。誰でも愛せぬ者はない。炭が獨身であつた時には、ほんとうに嫌はれものであつた。それがサア火と結婚して、二人が一處になつた處がまるで反對に、すべてに愛される様になつた。炭は火を我有がほにして居れば、火は炭を自分の有として食ひ込んでゆく。炭と火と二人が一つになつた處が念の字のすがたである。

私共の眞黒な炭の様な煩惱の心でも如來の智慧や慈悲の火が加はると、炭に火がついた様に婆娑の憂世の寒さも忘れて、大慈悲の火の様に温かに日々に愉快に、ありがたく日暮しが出来る。如來と我と胸の中に二人が一人になった心、念佛心である故にありがたく温かに日暮しが出来る。正月の屠蘇に酔つぱらつて道を妙な顔をして通る人は酒と二人が一人になつてゐる。其の尊き如來の慈悲の火が、我等が胸の中によくカンくとおさる様にするには、南無阿彌陀佛の風が通はぬとならぬ。

四九

御手紙披見候。庵室の事に心配云々。夫れは此の人間界に生きてゐる役にて據なき事、只心だに、如來に御仕へ奉るとの安心なれば一切の業作皆佛心佛行にて候。人間は矢張り種々の辛苦して見ねば修行にならぬ。又將來の事は今日一所懸命に御佛に仕へ奉つて、如來様に然るべき様御願申上げて置けば自分で心配せずとも、如來様の

方より宜い様にして下さるから、只々今日のつとめを大事にして、明日の心配は明日になつてよろしい。日々ありがたくつとめさせて戴く事になつたが何よりの御慈悲なれば、是から此の上どの位まで、如來様の御力が加はりて、忍耐出來得るか、又如何なる事に出合ふても、悦ばれるかを如來様の御試験を折々受けつゝ修行が進みゆくべきのである。

次に肺病人と一處に居る事、其の傳染の事は其の豫防法が意得ぬとうつる。其の意得のなき人は肺病は當人の熱でもうつるやに思ふて居る。決して熱でうつるものではない。タンの中に目に見えぬ微菌が居る。それが澤山になると食器杯また夜具類衣類でも自然々々についてゐて、それが口に入るとか又鼻から吸込むとかすると、身體の中に這入つて其の弱き處について、それが種になつて、殖えるのである。それでも自分の體が達者であれば大丈夫である。だから心配するには及ばぬけれ共、注意しなくてはならぬ。肺病院の看護婦等は、ヒドイ肺病人が何十人となくゐて、其の中に何十

年ねんとなく其きの病人びやうにんを看護かんごしてゐても、うつりもせぬのは能よく意得こころえてゐるからである。達者たつしゃな人ひとはたとひうつりても自分じぶんでも知らぬ位くどゐに一生過せうすぐる人ひともある。世間せけんには自分で肺病はいびやうでありながら、それを知らずして、他の肺病人はいびやうにんを怖こはがつて居ゐる人ひともある。愚おろかな事ことである。

五〇

釋尊しつそんの御佛行中おぶつぎやうちゆうに阿羅々仙人あらかせんじんに就ついて、菜なをつみ、薪まきを採とり、水みづを汲きむ等の種々いんぐの困苦こんくをなされし事ことを聞きいて居ゐるであらう。今は御身おんみも阿羅々仙人あらかせんじんに就ついて、修行中しうぎやうちゆうであるから、聽やがて釋迦牟尼しよたかむにと云いふ如ごとき尼にとなるのである。只ただの尼あまではつまらない。それでも全く御身おんみの修行しうぎやうには阿羅々仙人あらかせんじんであるから大切な人ひとである。さて改めて申まをすまでもないが、愚ぐ衲たうの最もつとも力ちからを盡つくして弘ひろめる彌陀みだの光明主義くわうみやうしゆぎは從來じゆらいの純未來主義じゆんみらいしゆぎ只佛だいはつさまをだましてなりとも未來極樂みらいごくらくに往いつて、樂らくを致いたし度たいと云いふ主義しゆぎと全く違ちがふ處ところは現在げんざい

から如來の光明中に生活して、念佛も死ぬ爲の念佛ではなくて、生きる爲の念佛、死ぬ爲めなれば、何も念佛申さぬからとて、生れて來た以上は何人でも死ぬ。たとへ動物でも念佛申した事がなくても、時來れば死ぬ故に、死ぬ爲の念佛でなく、生きる爲とは一心に念佛して如來の光明に攝取せられて、段々と信仰心が温められて、遂に卵から雛子がはけ出す様に、念佛して御慈悲の光明に温められれば、信仰心がはやけ出して、活きた信仰となるのである。信心が生きて新に生れた信仰となつて見れば實に此身此のまゝ、如來大光明中に寝ても覺めても、光明中の住居である。此の信仰心が生きて來ないうちは、如來様とは死んでゆかねば、光明のなかに居なされぬものと思ふてゐる。光明中の日暮し清淨歡喜智慧不斷南無阿彌陀佛々々々々と心を清淨光の中に愉快に新たに清くく歡びと樂しさと、平和とにいつも取圍まれて、日暮しするのである。此の體につきては、苦しみが大なれば大なる程、如來の御慈悲も深く感じられるのである。此の身は全く修行に來たのである。折角修行に出て來て充分に

修行出來ずして、しまふのは實に遺憾な次第である。

辨榮の光明主義を以て現在から、如來様と離れぬものとなつて、如何なる場合にも如來の御力を力として、念佛を以て、如來様と離れぬ生命として、今のうちになるべく能く養ひ居りて、後には力のあらん限り、如來様の聖意を世に弘める事の出来る身にして頂く様に、如來様に斷へず、祈りなされ、そればかりが一大事である。自信教人信、如來の光明を盛る器として頂くのである此身を、それを又他人にもわけるのである。

五一

或信者の家庭にて、嫁がむつかしい姑を持つて居た。其のむつかしいのは唯むつかしいばかりでなく、其の嫁が憎くて／＼て居ても立つてもたまらぬのだけ共、其の中に於て又能くつとめる嫁には其の村内のすべての者の同情が嫁に集まり、其のつと

めを感心せぬ者はなかつた。其れ程衆人に感心せらるゝ程の嫁であつたが、もとく
凡夫である。其のむつかしいく姑が十年も前に此の世を去つてしまつた。して見
れば如何に憎い嫁でも仕方がない。財産は勿論すべての權利も全く、嫁の物となつて
しまつた。今日は其の嫁は如何である、どちらかと云へば、贅澤である。財産ある爲
に他人も敬ふ處からしても自然たかぶる。今日の處では、平凡以下の婦人となつて何
人も其の嫁を感心な嫁と譽め稱へる人は恐らく一人もあるまい。村中に感心な嫁と譽
め稱へられた婦人も今日は誰あつて譽める人もない。嫁はもと同人なれ共、前には姑
と云ふ鍛冶屋が能く金鎚を以て、常に鍛へて呉れたから感心な嫁であつた。此頃は鍛
へる器械がなへて、段々鎚がついて來た爲に美點の光が消へてしまつた。まだく求
淨庵の嫁などの鍛へ加減位では、とても鐵が鍛へられて、立派な力に成る事は出來ぬ
それでもその位鍛へられてさへ、まだく誰も感心しさうな光はまだ出て來ない。
それ處ではない。何とかしてもとの鐵のまゝで、いくら鎚がついてもよいから、此の

まゝ居りたいと思ふ。實はまた飽くまで、鍛へて頂きて、立派な名劍になりたいと思ふ。ふ慾がないのではないかと思ふ。話は別にして、何處かもつとく厳しいく本當に嚴しい老尼が世の中にあるかないか解らぬけれ共、左様な處へ行きて、修行したら宜いと思ふ。何でも自分の心がけが一番大事である。心にかけて居れば、何時でも何處でも修行は出来る。人の生涯は唯如來の光明を獲得して光明の生活光明に活動する處に眞の價値がある、此の目的を達せずして、生きてゐるのは無意味である。兩三年何處でか修行さして頂く様に頼みてみなされ。つまりはまだ修行不足であるから御意に適はぬのであるからといふて、修行さして下されと頼みてみなされ、又能く考へて見ると實は氣の毒なわけである。自分で自分の心に苦しめられてゐる。それはやはり、一の病氣である。だから自身でも心は苦しいに相違ない。どちらが苦しみがつよいか思へば氣の毒なわけである。能く考へてごらん。自分の心をすみ換へねば何處へ行つても同じ事である。

○

此頃流行感冒にて、風の神を宿し申して、熱やら苦痛やらに襲はれて、動もすれば冥土にまで連れ行かれ候ものも少からず候。願くば大慈悲のをや様を常に煩惱の中心に御宿し申して、日々にありがたき樂しき力ある生命ある光ある生活に入りて、而して後にはみおや様に誘はれて、清き御許に行くこと實に樂しきに非ずや。却説御尋ねの九州行は當年は行く事出來ずして。當地方に於て傳道致し候。

五二

月日のこまのはしり行くあしなみのいとはやく、此ほどまではあつさ耐えがたきばかりに、おぼへし夏の日はいつの間にかはや過ぎさりて、も早や物さびしき秋の氣候とはなりにけらし。すだく虫の音聞くときは何となく秋の夕暮のさびしさを 感じら

る。

蟹下の國生の尾花の穂について風のまに／＼舞ひぬれば、うたふ虫の聲に自然の天樂は草も虫も同じくしらす／＼ 歡喜光の恵みに自らはたらけるさまとやおもはるなるべし。

さよき同胞なる人々よ、有爲の世の、ならひ常なき此土のをきてなれば、生るゝ者は必ず死す。遇ふ者は定まりて離るる規定は免るゝこと能はざれば、さきつ頃、蟹下の國生に至りて、ともに

大ミオヤの御恵みの恭けなさを語りともに御ひかりのなかに日々に喜ばしき日ぐらしをなさばやと契りて樂しかりし日は、早や既に過ぎ去りて、いまは過去とはなりにけらし。然し乍ら共に

大ミオヤの光のなかに、こゝろはともに、ありがたく、悦ばしく日を暮すことはたとひ、いく重の山と雲をへだてぬるも、決して離るゝことなきは信念のことにあり。

皆様よ、人が以世に生れついてゐてゐるは、たゞ肉體の快樂をもて、幸福と申すことにてはあらざるなり。此の世に出でたる目的は、種々の苦にも、難にも遭遇して、一心を磨き、而して

大ミオヤの御恵みと、御ひかりとをたのみて、大ミオヤの御むねに、かなふ人として、たましゐが、みひかりに靈化せられて、如何なる苦難の中にも、進んでそれを甘受するやうな、精神になるべき修行を爲すこそ、人生の目的にてあると、信する時は天の大ミオヤの思召しにかなふが故に、からだよりは精神に幸福を感ずる様になるなり。

であるから、たとひいかなる事に遇ふとも、是のために修行が出来る、磨きが出来ると思ふて、進んで悦ぶやうに信念を大ミオヤによりて養ひたまへよ。

此の度の因縁によりて一家心を一にして、大ミオヤを、たよることになりしは誠に喜ばしき次第なり。

殊にまた特別にあなたがき　よき信佛心は泉のごとくに湧出して、朗かにたふとき
聖經を、よみなされしことの目出度さよ。大みおや信じ　とあなたを、もしや永遠
にたとひ天地は盡くる時あるも、盡る時なき、きよき同胞として、たのもしく思はる
ゝなり。

御一統の衆がともに　大ミオヤの光によりて、日に／＼かたじけなき日ぐらしを
爲すやうになり、またの世も、ともに／＼大みおやの樂しきみ國にいたり諸の
上善人とともに一處に會すると云ふことを得べき御心と成りてまたいかにうれしか
らん。

あなたがまことに／＼大ミオヤの光によりて眞にいける觀世音ばさつと成て皆さま
をみらびくことになるやうに、ひとへに御たのみ申し候。

暮の忙しさに、まぎれて、

いける如來さまを御佛だんの中におさめて置いて、あなたは、自分ひとりに成つて焦つて居りはせぬかとおもはるゝなり。

念、二人の心になりて居りますか。

佛さまと一所に居らぬと、殺鬼の鬼に胸の中に宿られて、苦しめぬでもよい事に苦しまなくてはなりませぬ。

佛さまは、いつでものどけき春の心地して御座るから、外がせはしければ、せはしいほどのどかな佛を胸のうちに安置して居らぬとちがひます。

それから皆さまに御だづね申すことあり。

宗教は安心が大事にて候。安心と云のは宇宙間に二人とない如來と、いかなる事情の下にも離別の出来ぬ結婚のことにて、心靈が如來と結婚して、此世後世生命も魂もすでに一任して、アナタのものとすることである。そうするから如來も亦我有として

いかなる場合にも、偉大なる御ちからを加へて下さるのである。

生命も献げて一任すればこそ、此の罪の深き地獄一定の悪人を却つて、可愛と思召して、御憐れみ下されたまふのである。

あなたに御尋ね申します。

若しあなたが、病氣とか、また何かの事で他の佛とか神とかに、祈禱せざれば、命がたすからぬと云ふやうな場合には、如來さまを、さしおきても大事な命のことであるから、他の神佛をたのみますか。また已に如來さまに献げた生命であるものいづれにても、如來のよろしきに一任して、安心して、他の佛や神をたのみ事をしませんでせうか、あなたのいつはりなき告白を聞きたい。

あなたの安心がかやうでせうか。

あみだ如來よ、あなたの外に決して他の神や佛におまかせ申しませぬ。あなたの外に私の大ミオヤは有りませぬ。あなたの外に妾の魂を御まかせ申す御方は有り

ません。あなたの外に妾の胸の奥をうち明けて御たのみ申す方は有りません。

いかなる事情の下にも他の神や佛を、御たのみ申しませんと云ふ様な全幅をさへげて、如來に御まかせ申す。如來に對する眞の信情の操が立ちませは、眞の美しい安心である。

如來様の御慈悲の面かげが彷彿として眼前におもはれますか、夜のめざめの中にもなさけ深きおやさまがしられませぬか。

徳本行者が、あみだくと聲するひとの胸に佛の斷間ないと。

我がみほとけのじひの面、朝日の方に映るひて、照るみすがたをおもほへば、靈感さわまりなかりけり

五四

百の山、いく重の雲は、へだつれど

こゝろは同じみかりのなか

昨日は懐かしき御地の里を辭せんとするに臨み、きよき吾同胞の君たち　ふかきまこゝろを注ぎ王ひて御見立にあづかりしことは、實に厚く感謝する處なり。

汽笛一聲流れゆくけぶりのなかに、なつかしかりし、君たちの御面かげはかくれてしばしのほどに、山邊より里いくらとなく越ゑたる此處と彼處とはなりにけらし。されども御互ひに心は同じ大ミオヤの、みひかりのなかに、平和にくらし居るものと思へば悦ばしく存せらるゝなり。

さて此たびは、おぼろげならぬ因縁にもようされて、幾ばくの日を重ねてねんごろなる御もてなしにあづかりしことの深き思召しに對しては大いに感謝し奉り候。

殊にく悦ばしきは皆御心を一にして唯一に在ます大ミオヤに歸依信頼して此世、後の世ともに御任せ申し上て深き信念を發し玉ふにいたりし事にて候。

しかる上は皆様と日々に同じく大ミオヤの聖旨をたよりおめぐみにはぐくまれて同じく光明の中に生活し、而して此世の事を果たしたる曉には、同じく光明永しに輝く處の樂しきみやこにておたがひにきよき身となりて、かたり合ふことを、うるものとゆく末かけて、いかばかりか樂しく存じ候。

五五

歡喜光の中に年を迎へてめで度くお祝ひ申し候。

願はくは光明會のきよき友の衆よ、眞實に光明の中に意義のある光明の輝く新らしき年を迎へて一日くによすく光明に向つて突進するやうにいたし度く存じ候。

舊いといふも新たらしいといふ。實は假の名目にて、新らしい年を迎ふるは、迎ふ

る度毎に實は人間は舊く成つてしまふ。それでも心のうちに如來の光明を信得すればまたく新らたなる光明を發見すること限らない。

人間は何が一番仕合でせうとなれば、先づ私は本とうに親を知りて、親の慈愛に抱かれていつまでもくゝをることが出来る人であるとおもふ。さればとて人間の親はさういつまでも、一處に居ることは出来ぬ。此の世はをろか未來遠きにまでも、離れずに大なる慈愛の光明に懷かれて居る御互は此上もない幸福ではありませぬか。

此世の中に大なるミオヤの在ますことを知らずして、あたらし人生を氣儘、我儘に空しく徒らに闇の裡に葬つてしまふ人は、本とうに親様に對しても不孝のみならず、自分でも本とうに損であるけれども、左様な人は只だ氣儘に贅澤で世を送れば眞の損といふことがわからぬ物故、還て其の方が幸福だと思つて居る。夫れと云ふも大ミオヤの聖意が少しもわからぬ故である。又人生は何の爲めに生れ來りしや、目的が何の爲めとも定まらぬからであるとおもふ。

とても此世の中は何事とても、さう思ふ様には行かぬものであるから自分の心で

大ミオヤを一心に念じて御光明に寄りて心を取りかへていたゞけば悲しみも變んじて喜となる。不幸も轉じて幸福となる。是はど有離い光明が常に身邊を照しあるを知らずして、自分に自分で罪を造り、苦しみも構へて、日々に日暮しをする人は本とうに可愛さうである。

どうかして大ミオヤの光を世の人々に、しらせ度くおもふて、夫れのみを思ふてをり候。

五六

生者必滅は人界の習、會者定離は浮世の掟なれば、大聖釋迦如來さへも、ついに涅槃の雲に隠れ、紫摩金色の御身も亦檮檀の煙と消えはてぬ。實に世の無常のさまされば朝に咲ける花、夕の嵐に散りやすく、夜にむすぶ露は、朝日の前に消えはてぬ。實

に頼みがたきは、世のさまなれ。

たゞく頼むへきは、慈悲の親さまより外に便るかたなく候。悲しみ深ければ深き程、慈悲の親さまをふかく御頼みなさる様に願はしく候。

慈悲の親様はすべての衆生の大ミオヤにてあれば、すべての子を愛したまふこと一子のごとくに思召し玉ふてましますならめ。

昔、和泉式部は一の愛子、小式部の内待に先だたれ、何とも悲しみのやる瀬なく、なげきて

もろともに、苦の下には朽ずして、ひとり憂きめを見るぞ悲しき

と詠まれた。とても死ぬならば、もろともに、死ぬがましである。ひとり残されて憂き目を見ることの、うたてさよ、と堪ぬばかりに悲しまれたが、性空上人の教に本づきてのちに彌陀の本願に乗じて念佛三昧の信念を一つにして、ついに如来の慈悲の光明に照護せられ光明に觸れてからは從來の心の闇も晴れて心も生れ更るほどに

ありがたき心となりて、光明の日ぐらしになられた、その頃の歌に

ゆめの世にあだにはかなき身を知れと教へて歸る子はほとけなり。と、

能く自分が信仰の目を覺して眞實に如來の御慈悲がわかるように成てかへりみれば自身が全く眞の信心もあらはれ、光明の日ぐらしに成ることができたのも、其の本はと云ば、我子が智識と爲りて我をみちびきてくれたから全く信仰に入つたのであるして見れば我子とは云ふものゝ彼小式部は如來の御使として我を信仰に入れて呉たのであると。

これは昔の話のやうなれども、やはり先立たれたる一子は諸君を永い／＼未來の一大事の安心にみちびくように、如來様からの御使でありますから、どうぞ一心に慈悲の親さまを頼み參らせ、一心に念佛を稱へて光明に接するやう、御勸め申します。皆様の御心が如來の御慈悲の光に接して全くあの子は如來さまの御使ひであると信心の眼の開いた時、一子も慈悲のふところに抱かれた時なのであります。